岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第172集

本宿遺跡発掘調査報告書

国道107号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

本宿遺跡発掘調査報告書

国道107号改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600ヵ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の本宿遺跡は、和賀川左岸の河岸段丘面上に立地し、平成元年度の発掘調査により弥生土器を伴う土坑が発見されました。このような例は本県でも少なく、弥生時代の研究にとっては貴重な資料であります。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました江釣子村教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成3年11月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　工　藤　　巌

例　言

1．本報告書は、岩手県北上市上江釣子第19地割121－4ほかに所在する本宿（もとじゅく）遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はME 65－0169、遺跡の調査略号はMJ－89・MJ－90である。

3．本遺跡の発掘調査は、一般国道107号の改良工事に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、岩手県土木部の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

4．野外調査は2ヵ年にわたって実施し、調査期間・調査面積・調査担当者は以下のとおりである。

　第1次調査　平成元年9月11日～10月23日　2,400㎡　藤村敏男・斎藤邦雄

　第2次調査　平成2年9月3日～11月2日　3,300㎡　田鎖寿夫・佐々木弘

5．室内整理作業は平成元年11月1日～11月30日、平成2年11月1日～11月30日まで実施し、本報告書の執筆・編集には斎藤邦雄があたった。

6．石器の石材鑑定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。

7．本報告書の作成にあたり、次の方々から御指導・御助言をいただいた。（敬称略）

　桐生正一・高橋亜貴子（滝沢村教育委員会）、佐藤嘉広（岩手県立博物館）、高橋文明（北上市教育委員会）

8．野外調査にあたっては、北上市教育委員会及び地元の方々の御協力を頂いた。

9．国土地理院発行の地形図を複製したものは、図中に図幅名と縮尺を記した。

10．遺構の埋土観察・出土遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』（小山・竹原：1989）を参考にした。

11．本報告書に掲載した実測図の凡例については、II．調査経過及び調査方法等によった。なお、実測図の縮尺については図中にスケールを付した。写真図版の縮尺は不定である。

12．本遺跡から出土した遺物及び調査にかかわる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目　　次

序
例言

本　　文

Ⅰ　調査に至る経過……3
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
　1．遺跡の立地と地形……3
　2．周辺の遺跡……3
　3．基本層序……4
Ⅲ　調査方法と整理方法……8
　1．グリットの設定……8
　2．粗掘り……8
　3．遺構検出と遺構の命名……8
　4．精査と実測……8
　5．写真撮影……8
　6．室内整理……9
Ⅳ　検出された遺構と遺物……11
　1．掘立柱建物跡……11
　2．土坑跡……12
　3．溝跡……15
Ⅴ　遺構外出土遺物……18
　1．土器……18
　2．石器……18
Ⅵ　まとめ……20
　1．遺構について……20
　2．遺物について……23

図　　版

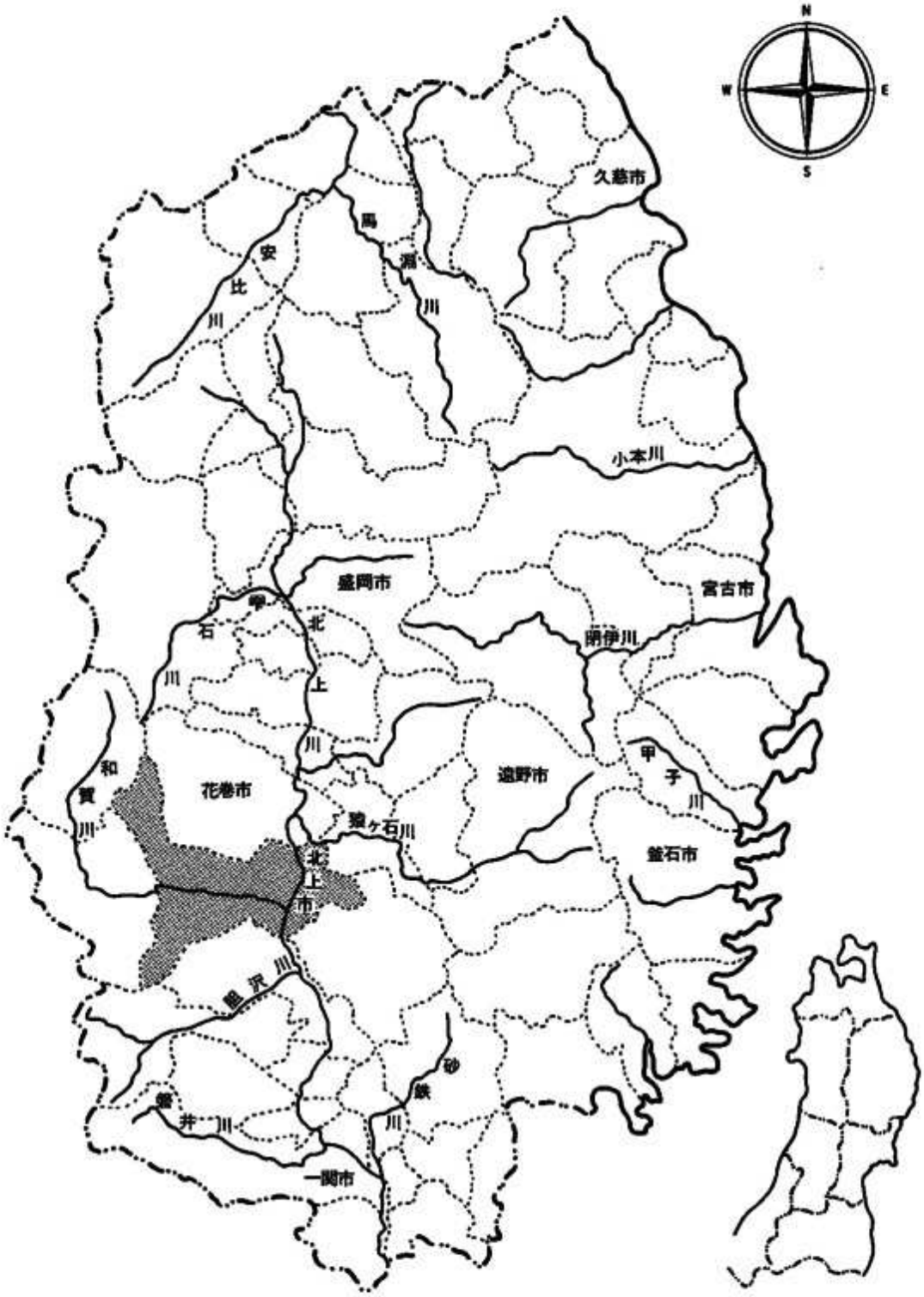
第１図　岩手県にみる遺跡の位置……1
第２図　遺跡位置図……2
第３図　基本層序……4
第４図　遺跡周辺の地形図……5
第５図　周辺の遺跡分布図……6
第６図　遺構配置図……10
第７図　SB01掘立柱建物跡……11
第８図　SK01～04土坑跡……14
第９図　SD01～03溝跡……16
第10図　遺構内出土遺物……17
第11図　遺構外出土遺物……19
第12図　岩手県内の交互刺突文系土器（１）……29
第13図　岩手県内の交互刺突文系土器（２）……30

写　真　図　版

写真図版１　調査風景・SB01掘立柱建物跡……33
写真図版２　SK01～04土坑跡……34
写真図版３　SD01～03溝跡……35
写真図版４　遺構内出土遺物……36
写真図版５　遺構外出土遺物……37

表

第１表　周辺の遺跡一覧表……7
第２表　掘立柱建物跡柱穴計測表……12



第１図　岩手県図にみる遺跡の位置

1:50,000 北 上
1000 0 1000 2000 3000
村崎野
鬼柳町
相去町
江釣子村
上江釣子
下江釣子
滑田
鳩岡崎
北鬼柳
本宿
藤木
五条丸
新井田
上鬼柳
下鬼柳
東北自動車道
北

第2図　遺跡位置図

I　調査に至る経過

一般国道107号は大船渡市を起点に北上市、横手市などを経由し、本荘市に至る総延長約197 kmの路線であり、太平洋沿岸から日本海沿岸を結ぶ横断幹線道路である。近年の北上付近では、交通量の増加に対処するため、新珊瑚橋橋梁整備事業や107号道路改良工事に着手している。

本宿遺跡は北上・江釣子インター付近にあり、調査は国道107号道路改良工事に伴うものである。遺跡の取り扱いについては、岩手県土木部北上土木事務所と岩手県教育委員会との間で現地確認等の事前の協議がなされ、工事計画に沿って発掘調査を平成元年度と2年度に岩手県文化振興事業団の受託事業として調整実施することにした。

これをうけて当埋蔵文化センターは平成元年8月28日付け委託契約により2,400 m²の調査を9月11日から10月23日まで実施した。引き続き同2年8月28日付け委託契約により3,300 m²の調査を9月3日から11月2日まで実施した。

II　遺跡の立地と環境

1．遺跡の立地と地形（第1・2・5図）

本宿遺跡は、東日本旅客鉄道北上線江釣子駅の東南東約0.8 kmに位置している。遺跡の約1 km南側には、奥羽山脈から流れる和賀川があり、和賀川は県内陸部のほぼ中央部を南流する北上川に合流する。この地域周辺は、北上川によって形成された河岸平野を挟み東西に特徴的な地形を発達させている。遺跡を含む北上川西部地域は、和賀川とその支流の夏油川・尻平川によって大規模な扇状地性段丘群が形成され、東部地域には丘陵地状の地形を発達させる。この扇状地性段丘群は、西根・村崎野・金ヶ崎の大きく3つの段丘に区分されている。旧江釣子村周辺には、村崎野段丘と金ヶ崎段丘が広く分布している。さらに、金ヶ崎段丘は局地的ではあるが、上下2段に区分される。金ヶ崎段丘下位面と河岸低地との比高は、2～3 mである。本宿遺跡は、この金ヶ崎段丘下位面上に立地しており、標高72 m前後である。

2．周辺の遺跡（第6図、第1表）

北上市江釣子地内には、奈良・平安時代の遺跡を中心に旧石器時代からの遺跡があり、それぞれ立地に特徴がみられる。

旧石器時代の遺跡としては、村崎野段丘上に持川・鳩岡崎上の台遺跡がある。持川遺跡からは石斧・剝片、鳩岡崎上の台遺跡からはナイフ形石器・石刃・石核が出土している。同じ段丘

面上には藤沢遺跡がある。

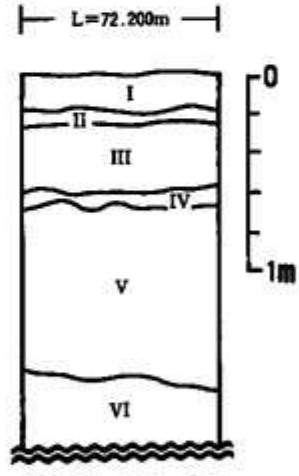
縄文時代では、前期～中期の遺跡が村崎野段丘に立地する傾向があり、鳩岡崎上の台・横堰I・新平遺跡などがある。鳩岡崎遺跡では、前期末葉～中期初頭の多くの土坑を伴う集落が発見されている。中期末葉から後期の遺跡は、本宿など金ヶ崎段丘上に立地している。

弥生時代では、初頭の谷起島式に類似する土器が蔵屋敷遺跡から、後半の天王山式土器に併行する土器が中田遺跡・猫谷地遺跡から出土している。遺物の出土はあるが、遺構が確認された例はない。

奈良・平安時代の遺跡は、金ヶ崎丘縁・段丘面の微高地上・村崎野段丘縁に立地している。なかでも、奈良時代の遺跡は金ヶ崎段丘縁、平安時代の遺跡は村崎野段丘縁に多く立地する傾向がある。また、五条丸・猫谷地古墳群は和賀川の自然堤防上、八幡古墳群は金ヶ崎段丘上に立地している。

3．基本層序（第3図）

調査区全域は南東方向に向かい緩やかに傾斜しているが、概して平坦な面で構成されている。耕地整理などにより、旧地形は大幅に改変を受け当初から遺構の残存状態も良好でないことが予想された。地域によりやや様相を異にするが、基本的には以下のように大別される。



第3図　基本土層

第Ⅰ層　黒褐色土（7.5 YR 3/1）　シルト　水田土壌上部。粘性が大きく軟らかいが、緻密である。南及び南東ほど層厚を増す。層厚 10～20 cm。

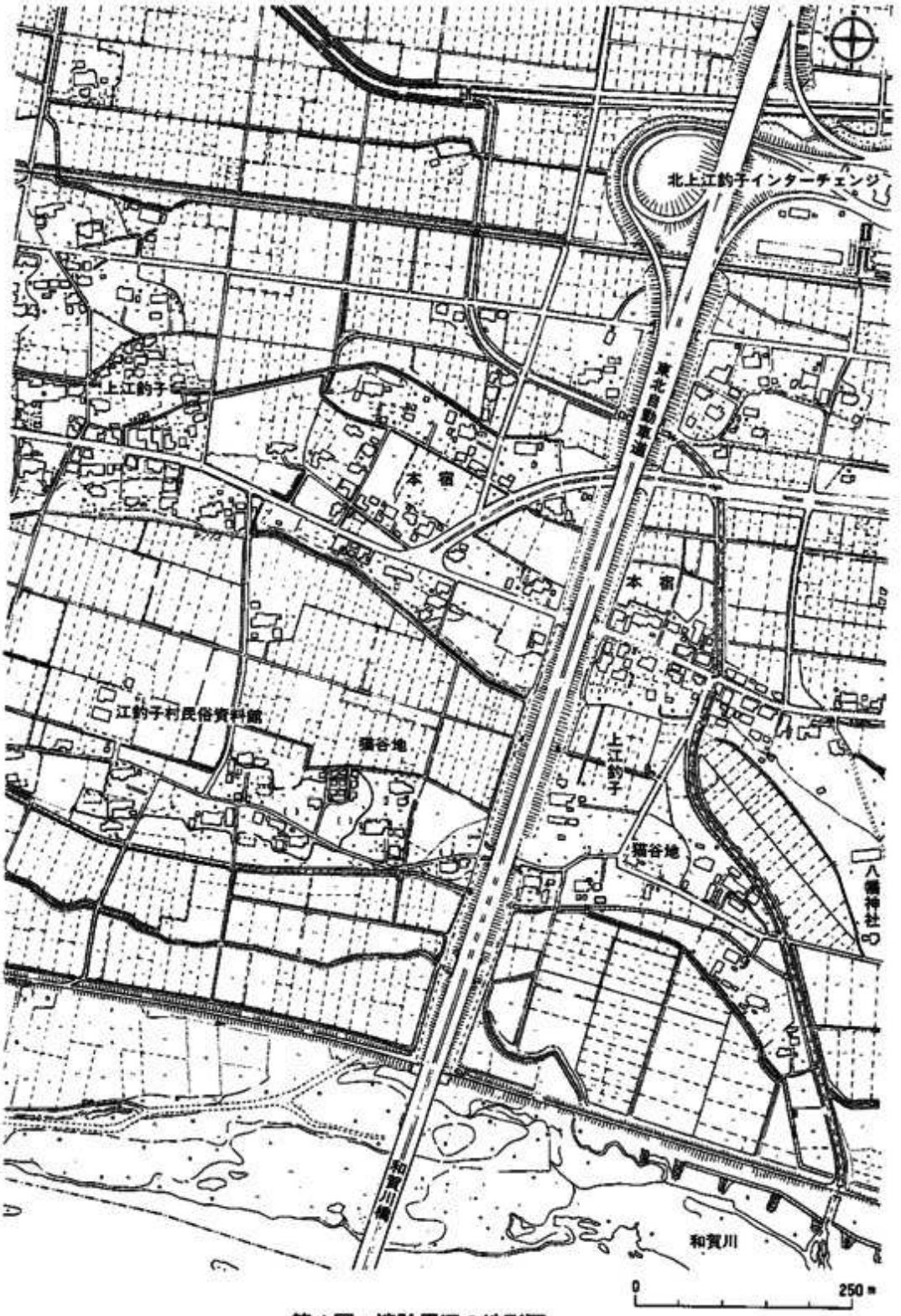
第Ⅱ層　黒色土（7.5 YR 2/1）　シルト　水田土壌下部。やや粘性があり、軟らかい。酸化鉄が散在する。層厚 10 cm。

第Ⅲ層　黒色土（7.5 YR 1.7/1）　シルト　やや粘性があり、軟らかで緻密である。場所によりことなり南東に向かって層厚を増す。層厚 20～40 cm。

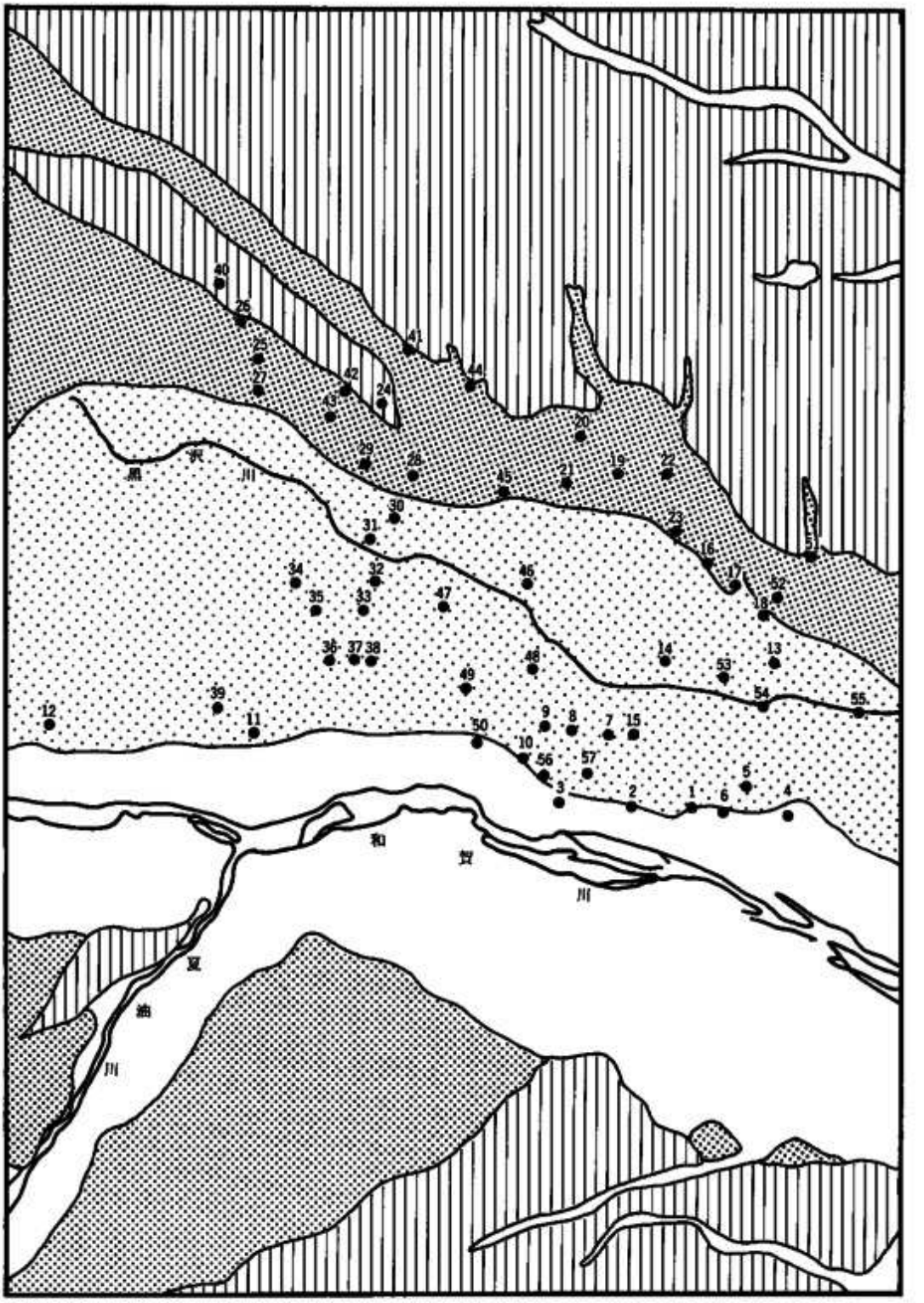
第Ⅳ層　黄褐色土（10 YR 5/6）砂質粘土の漸移層。粘性・しまりともある。層厚 10 cm。

第Ⅴ層　黄褐色土（10 YR 5/8）粘土、軟らかい。部分的に粗砂が混入する。層厚 80 cm。

第Ⅵ層　礫層



第４図　遺跡周辺の地形図



河岸平野　金ヶ崎段丘低位面　金ヶ崎段丘高位面　村崎野段丘

第５図　周辺の遺跡分布図

第1表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	時　　代	遺　構　・　遺　物
1	八幡古墳群	古墳，奈良，平安	
2	猫谷地古墳群	古墳，奈良，平安	古墳，竪穴住居跡，土坑，溝跡，炉跡
3	五条丸古墳群	古墳，奈良，平安	竪穴住居跡6，溝跡，土坑
4	鳥海柳	奈良，平安	
5	高橋	平安	竪穴住居跡4，土坑，溝跡，円形溝跡，落とし穴状遺構
6	八幡	古墳，奈良，平安	
7	本宿	縄文（中・後），古墳，奈良，平安	
8	本宿羽場	平安	土坑，竪穴住居跡，合口甕棺
9	塚	奈良，平安	竪穴住居跡7棟，柱列跡，土坑
10	五条丸館跡	中世	
11	下江釣子羽場	奈良，平安	
12	巌屋敷	弥生，奈良，平安	谷起島式（弥生）
13	荻島	平安	
14	下谷地	平安	
15	上藤木	中世～近世	
16	野崎Ⅰ	奈良，平安	
17	野崎Ⅱ	奈良，平安	
18	清水畑	奈良，平安	
19	鳩岡崎高台	縄文（前・中），奈良，平安	
20	横堰Ⅰ	縄文（前・中），奈良，平安	
21	横堰Ⅱ	奈良，平安	
22	鳩岡崎上の台	旧石器，縄文（前・中），奈良，平安	土坑，竪穴住居跡
23	鳩岡崎三館	平安，中世	
24	新平	縄文（前・中），奈良，平安	
25	道の上長根Ⅰ・Ⅱ	奈良，平安	
26	道の上長根Ⅲ	奈良，平安	
27	道の上長根Ⅳ～Ⅵ	奈良，平安	
28	神川	旧石器	石斧，剥片
29	高畑	平安	
30	中道Ⅰ	平安	
31	中道Ⅱ	平安	
32	折橋	平安	
33	清水	平安	
34	荒屋Ⅰ	平安	
35	荒屋Ⅱ	平安	
36	荒屋Ⅲ	平安	
37	荒屋Ⅳ	平安	
38	荒屋Ⅴ	平安	
39	大坊	奈良，平安	
40	新平Ⅰ・Ⅱ	縄文，奈良，平安	
41	新平屋敷跡	近世	
42	長根	縄文	
43	渋田	平安	
44	芦萱	奈良，平安	
45	下猿家古館跡	近世	
46	田代	中世～近世	
47	和野	奈良，平安	
48	上江釣子	平安	
49	江釣子城跡	中世	
50	江釣子館跡	中世	
51	中田	弥生，奈良，平安	天王山式（弥生）
52	曽山Ⅰ・Ⅱ	平安	
53	朴島Ⅰ～Ⅳ	平安	
54	三枚橋	平安	
55	柳田	平安	
56	五条丸Ⅰ	平安	
57	五条丸Ⅱ	平安	

Ⅲ　調査方法と整理方法

1．グリットの設定（第2図）

調査対象区域は5,700㎡と広範囲にわたる。調査が2ヵ年にわたるため、初年度に全調査区を網羅するように10m×10mのグリットの設定を行った。グリットの命名は、調査区北西端を原点とし、南側へはローマ数字のⅠ･Ⅱ……、東側へは大文字のアルファベットA･B……を付し、これを組み合わせてAⅠ･BⅡというようにグリットを表現した。原点から東へ80m、南へ50mの地点が基本杭1に相当する。基本杭1から南方向の延長線上に基本杭2がある。区画の南北線は真北に対して約3°東側に偏している。

基本杭1　X＝－78440,580m　Y＝21927,704m　H＝72,499m

基本杭2　X＝－78478,435m　Y＝21925,376m　H＝72,627m

2．粗掘り

各区に2m×10mの南北トレンチを任意に11本設定し、土層の堆積状況と遺構･遺物の密度を確認することを目的に手作業で実施した。その結果、遺物も少なく遺構の存在も確認されないことから基本層序のⅠ～Ⅲ層は重機により粗掘りを実施した。

3．遺構検出と遺構の命名

遺構はⅣ層上面で検出されている。検出された遺構には、検出順に下記のように遺構名を付した。

掘立柱建物跡　SB01～　溝跡　SD01～　土坑類　SK01～

4．精査と実測

土坑類は2分法で精査を実施し、遺構の平面図・断面図は20分の1の縮尺で実測を行った。溝跡については任意に土層観察用のベルトを残し、平面図は40分の1、断面図は20分の1の縮尺で実測を行った。基本層序についてはローマ数字を、埋土の土層は上位から順に算用数字を用いて表現した。

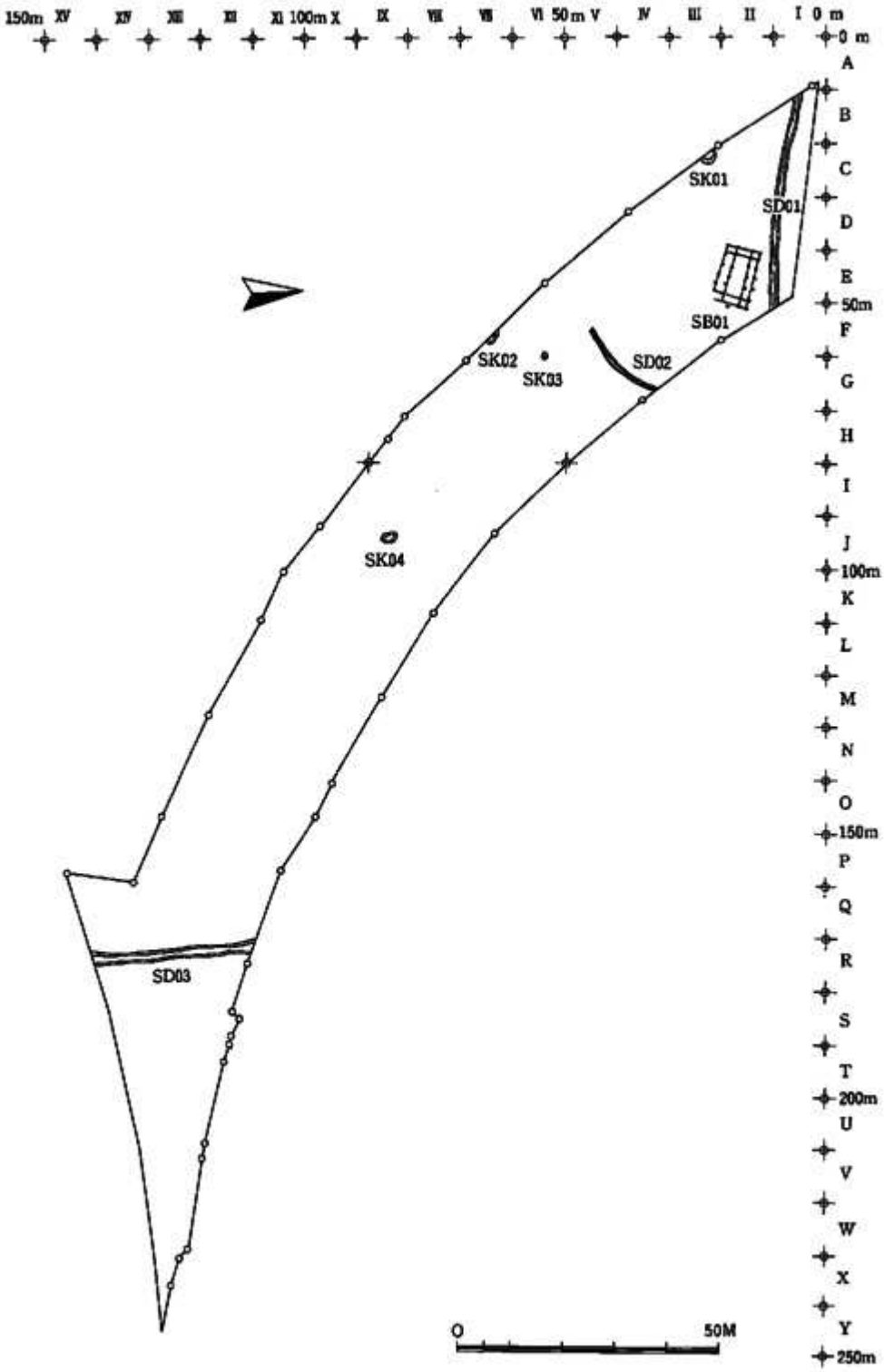
5．写真撮影

野外調査での写真撮影は、35mm判のモノクロ、カラー、リバーサル、6×7cmのモノクロを使用した。

6．室内整理

遺物の処理は水洗いとラベルの記入を行い、種類毎に仕分け・接合復元・実測・トレース・拓本・写真撮影の順に作業を実施した。

遺構図版は、原図の点検・修正・合成の後、第2原図を作製し、トレース・図版作製の順に


150m XV XIV XIII XII XI 100m X IX VIII VII VI 50m V IV III II I 0 m
0 m
A
B
C
D
E
50m
F
G
H
I
J
100m
K
L
M
N
O
150m
P
Q
R
S
T
200m
U
V
W
X
Y
250m
SK01
SD01
SB01
SK02
SK03
SD02
SK04
SD03
0
50M

第6図　遺構配置図

進めた。遺構図版の縮尺では、土坑類は平面図・断面図とも40分の1、溝跡は平面図が160分の1、断面図が40分の1で掲載し、各図版の下にはスケールを付した。

遺物図版は、遺構内出土遺物と遺構外出土遺物に分けて掲載した。縮尺は、土器・土器拓影図・礫石器が3分の1、剥片石器は3分の2で掲載し、図中にスケールを付した。

写真図版の中で遺構写真の縮尺は不定である。遺物写真については、復元土器・土器破片・礫石器は3分の1、剥片石器は原寸を基本としている。遺物の実測図番号と写真図版に付した番号は同一のものである。

Ⅳ　検出された遺構と遺物

調査の結果、時期不明の掘立柱建物跡1棟・溝跡3条・土坑3基、弥生時代の土坑1基が検出された。出土した遺物は、縄文時代の土器・石器、弥生時代の土器、近世以降の施釉陶器である。

1.　掘立柱建物跡

SB 01 掘立柱建物跡

遺構　（第7図、写真図版1）

EⅡグリットに位置する。桁行6間（10.28 m）、梁行4間（6.30 m）の規模で、桁行4間・梁行2間の身舎と四面庇のつく建物跡である。棟方向は、N74°W を示す。桁行・梁行の相互の柱穴には規模・深さにやや差異は認められるが、柱穴は直線上に並ぶ一連のものと考えられる。間仕切りに関連する柱穴は検出されていない。柱穴の掘り方は円形で直径25～40 cm、深さ10～40 cm程度の規模であり、相対的に斜面下方である南側の柱穴は浅い傾向にある。柱痕跡は確認されなかった。柱穴の埋土は、粘性・しまりのないシルト質の黒色土である。

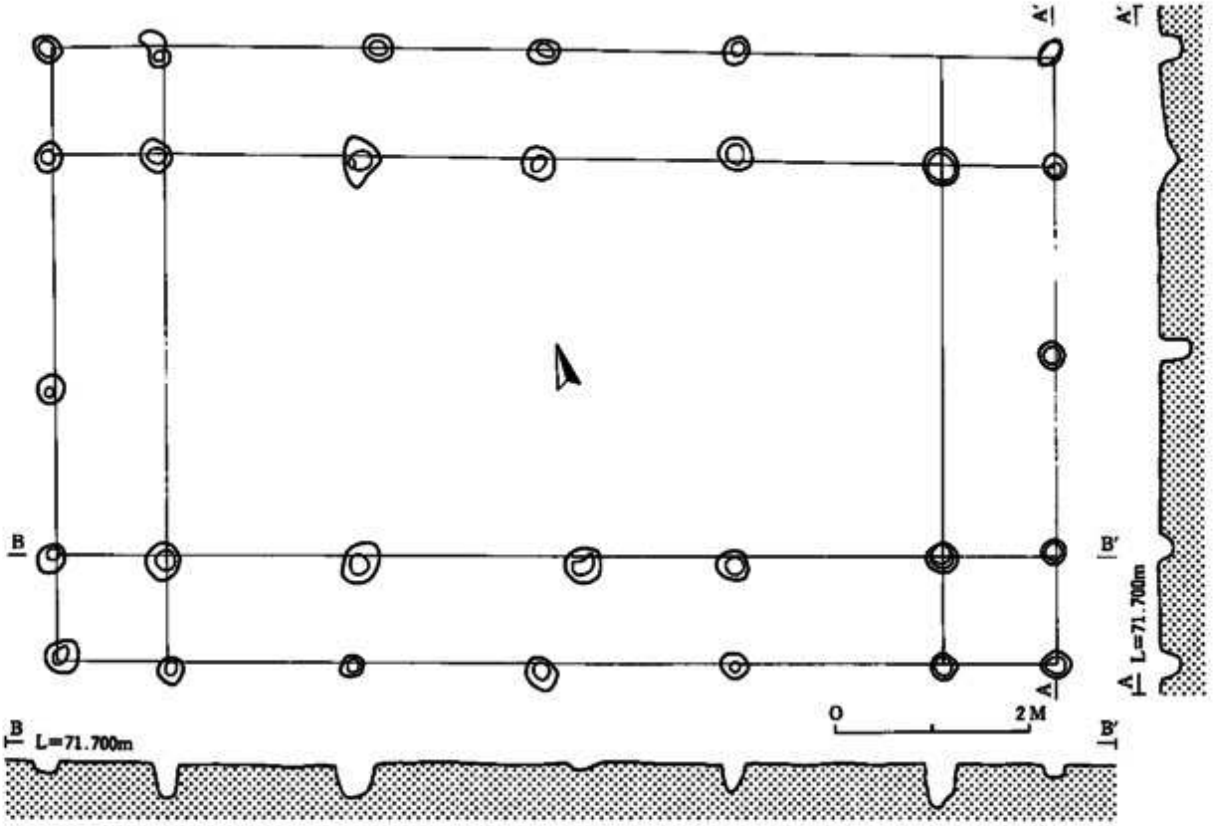
遺物　遺物は出土していない。

2. 土坑

SK 01 土坑跡

遺構　（第8図、写真図版2）

調査区北側、CⅢグリットに位置し、Ⅳ層上面で検出された。調査区外に延びるため、全容については不明である。推定で平面形は不整楕円形、断面形は皿状である。深さは20 cm前後で、底面は凹凸が激しい。埋土は2層で構成され、シルト質の黒色土が主体を占める。粘性・しまりともなく、非常に軟らかい。自然堆積である。



第7図　SB01掘立柱建物跡

遺物　遺物は出土していない。

SK 02 土坑跡

遺構　（第8図、写真図版2）

調査区西側、FVIIグリットに位置し、III層を掘り込んでいる。調査区外に延びるため、全容については不明である。平面形は不整長楕円形で長軸方向で256 cm、底面は凹凸が著しく深さが20～30 cmと一定していない。埋土は、粘性・しまりのない黒色土が主体である。自然堆積である。

遺物　遺物は出土していない。

SK 03 土坑跡

遺構　（第8図、写真図版2）

調査区西側、CIVグリットに位置する。検出面はIV層である。平面形は直径約70 cmの円形で、深さは15 cm程度である。底面は平らで、断面形は浅皿状である。埋土は、粘性・しまり

No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}
径 cm	32×26	40×18	26×24	32×26	28×24	28×20	30×26	34×30	48×38	32×30	34×32	36×34	24×22	30×28	24×22
深さcm	28	29	20	22	28	23	28	44	32	18	32	35	11	27	33

No.	P_{16}	P_{17}	P_{18}	P_{19}	P_{20}	P_{21}	P_{22}	P_{23}	P_{24}	P_{25}	P_{26}	P_{27}	P_{28}	P_{29}
径 cm	30×26	38×34	46×34	38×36	32×30	32×28	24×24	36×32	28×26	24×22	36×30	30×26	26×26	28×28
深さcm	11	34	32	33	8	44	14	11	5	9	9	7	19	20

第2表　SB01掘立柱建物跡柱穴計測表

のないシルト質の黒色土である。遺物の出土状況などから、この土坑は上部をかなり削平されているようである。土坑上部の埋土がないため詳細は不明であるが、埋土の残存部分は単層であり、一時期に埋め戻された可能性も考えられる。

遺物　（第10図、写真図版4）

底面及び底面からやや浮いた埋土中から4個体分の弥生土器が出土している。1は、土坑の北東隅の底面から、口縁部を下に底部が上になり、押しつぶされたような状況で出土している。肩部付近に最大径をもつ甕形土器である。底部から胴部中央まで、緩やかに立ち上がりすぼまるように口縁部にいたる。口縁部は外傾し、ほぼ等間隔に5ヵ所に刺突文が施された縦の棒状隆帯が貼り付けられる。口縁は平縁で、隆帯が貼り付けられた部分だけ多少もりあがっている。口縁部と胴部は1条の交互刺突様浮線文で区画され、口縁部には斜行縄文が施文される。口頸部から胴部最大径付近までは無文、それ以下底部下端までは斜行縄文が施文される。口縁部内面には、条間の広い斜行縄文が施文される。口唇部には袋状の刺突が施されている。頸部の交互刺突様浮線文は彫りの深い平行沈線を引き、刻目と同時に粘土のまくれを器面に押し付けることにより交互刺突様の効果を表出している。口唇部でも同様な手法が採られ、袋状の刺突文となっている。胴部内面にはナデ様の調整がなされており、また籾痕も観察される。胴部下半と口縁部には煤の付着が見られる。灰白色を呈し、胎土は精選され、焼成も良好である。2～4は土坑の南西側で底面から数cm上のところで、横に押しつぶされたような状況で出土した。2a～2cは、同一個体の甕形土器の破片である。1と同様頸部の交互刺突様浮線文を境に、口縁部には斜行縄文が施文され、それ以下は無文帯、さらに肩部付近には複数の沈線で弧状文ないしは重菱文が施文されるようである。胴部付近では縄文の条は斜行し整然としているが、下半は重複しており整然さに欠ける。明赤褐色で胎土は小礫を多く含み、内面は凹凸が著しい。3は、甕形土器の胴部最大径付近の破片である。胎土・色調とも、1に酷似する。頸部付近は無文帯、それ以下には斜行縄文が施文される。胴部に施文される斜行縄文は、最大径より下半になると条が整然さを欠き重複する部分がある。外面には煤の付着、内面にはナデ調整の痕跡が認められる。4は、甕形土器の胴部下半である。地文として斜行縄文が施文されるが、重複する部分が多い。下向きの弧状沈線文が施文されていた痕跡がわずかに認められる。浅黄色で胎土には

小礫を若干含み、硬質で焼成は良好である。

SK 04 土坑跡

遺構　（第 8 図、写真図版 2）

調査区のほぼ中央 JIX グリットに位置する。IV 層の黄褐色土層を掘り込み面としている。平面形は隅丸長方形、断面形は U 字状である。規模は開口部で長軸方向 198 cm、短軸方向で 106 cm、深さは 60～65 cm で底面に凹凸がある。短軸方向の壁は緩やかに外傾し、長軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面の北側隅はやや内側に入りこんでいる。底面は凹凸が著しく、構築の際に礫層の礫を外した跡とも考えられる。埋土は黒色～黒褐色のシルト質土で、自然堆積を示す。長軸は磁北に対し、N30°W の傾きを持つ。

遺物　遺物は出土していない。

3．溝跡

SD 01 溝跡

遺構　（第 9 図、写真図版 3）

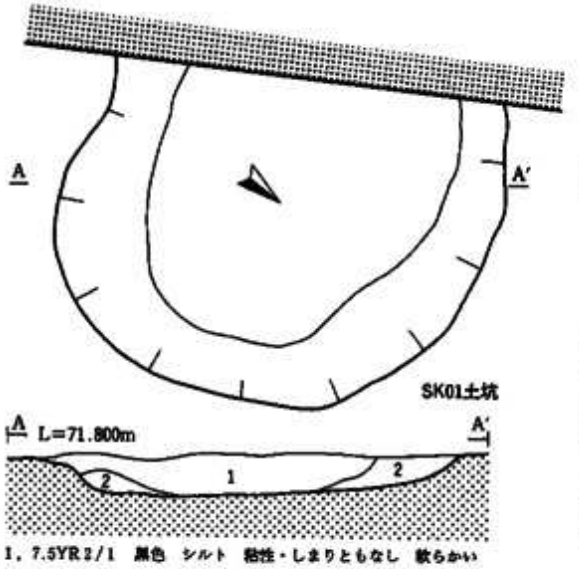
調査区最北端に位置している。東西方向 42 m にわたって検出された。両端ともさらに直線的に延びるが、東端は攪乱を受けている。幅は開口部で 105 cm、底面で 70～80 cm である。深さは場所により異なるが、平均 16 cm ほどで西側が若干深くなっている。両端の高低差は約 19 cm と、それほど落差はなくほぼ水平である。埋土は、黒褐色のシルト質土でしまりもなく、非常に軟らかい。底面に粗砂の確認されている所があり、流水溝の可能性も考えられる。埋土は自然堆積である。

遺物　遺物は出土していない。

SD 02 溝跡

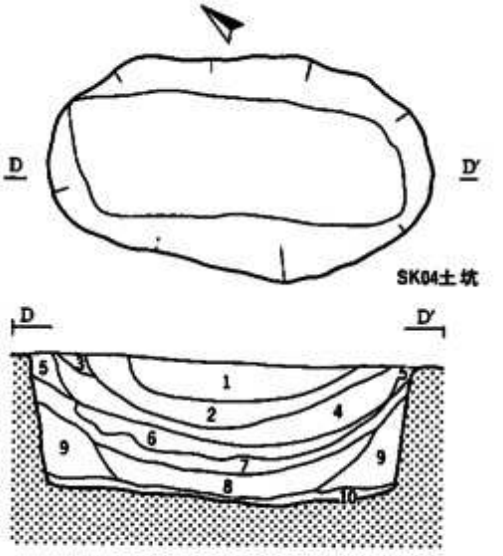
遺構　（第 9 図、写真図版 3）

調査区西側 GIV～FV グリットに位置する。緩やかに蛇行し、北東から南西方向に向かい約 18 m にわたって検出された。南西端は自然に消失している。北西端はさらに延長するようである。幅は場所により異なるが、平均 50 cm 程度である。開口部に比較し底面の幅は狭く、断面は U 字状である。削平を受けているため、深さは 5～10 cm と浅く底面には凹凸が見られる。埋土は、しまりの弱い黒褐色のシルト質土が主体で自然堆積である。両端の高低差は 15 cm で、ほぼ地形に沿って傾斜している。埋土の断面観察で流水の痕跡は確認されなかったが、蛇行しながら傾斜に沿って構築されていることから、流水溝の可能性が考えられる。



1．7.5YR2/1　黒色　シルト　粘性・しまりともなし　軟らかい

2．7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性・しまりともなし　軟らかい



1．10YR2/2
黒褐色　シルト　粘性・しまりともややあり

2．7.5YR2/1
黒色　シルト　粘性・しまりともI層より強い

3．7.5YR3/1
黒褐色　シルト　粘性・しまりともややあり

4．7.5YR2/2黒褐色
シルト　粘性・しまりともややあり

5．10YR4/3
暗褐色　シルト　粘性・しまりともややあり

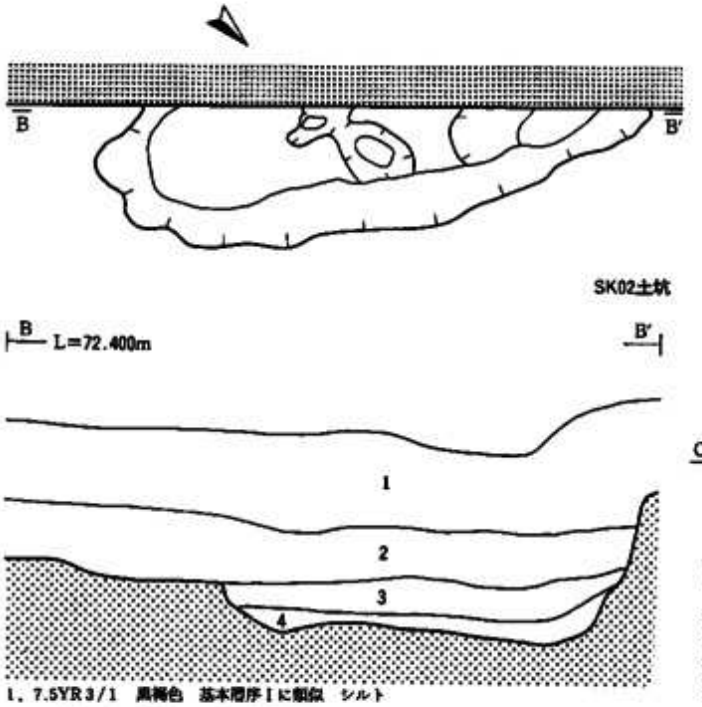
6．7.5YR1.7/1
黒色　シルト　粘性・しまりともややあり

7．10YR3/2
黒褐色　シルト　粘性・しまりともややあり

8．10YR2/3
暗褐色　シルト　粘性・しまりともややあり

9．10YR4/4
褐色　シルト　暗褐色シルトがブロック状に入

10．10YR2/3
黒褐色　シルト　粘性・しまりともややあり

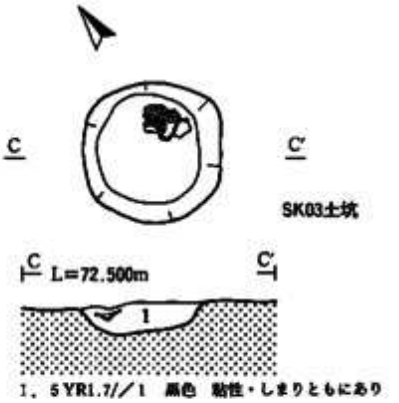


1．7.5YR3/1　黒褐色　基本層序Iに類似　シルト

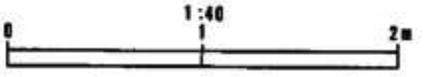
2．7.5YR3/1　黒褐色　I層に炭化物がやや混入　シルト

3．7.5YR1.7/1　黒色　シルト質粘土　砂混入

4．5YR2/3　極暗赤褐色　シルト質粘土



1．5YR1.7/／1　黒色　粘性・しまりともにあり



第8図　SK01～04土坑跡

遺物　遺物は出土していない。

SD 03 溝跡

遺構　（第 9 図、写真図版 3）

調査区東側 RXI～RXV グリットにかけて位置する。ほぼ南北に直線的に走り、26 m にわたって検出され、両端はさらに調査区外に延びている。幅 2 m、深さ 30 cm で礫層まで掘り込んでいるため凹凸が激しい。壁は直線的に外傾ぎみに立ち上がり、断面形は逆台形状である。南北両端の高底差は数 cm で、ほぼ水平である。埋土はややしまりのある黒色のシルト質土を主体にしており、自然堆積である。

遺物　（第 10 図、写真図版 4）

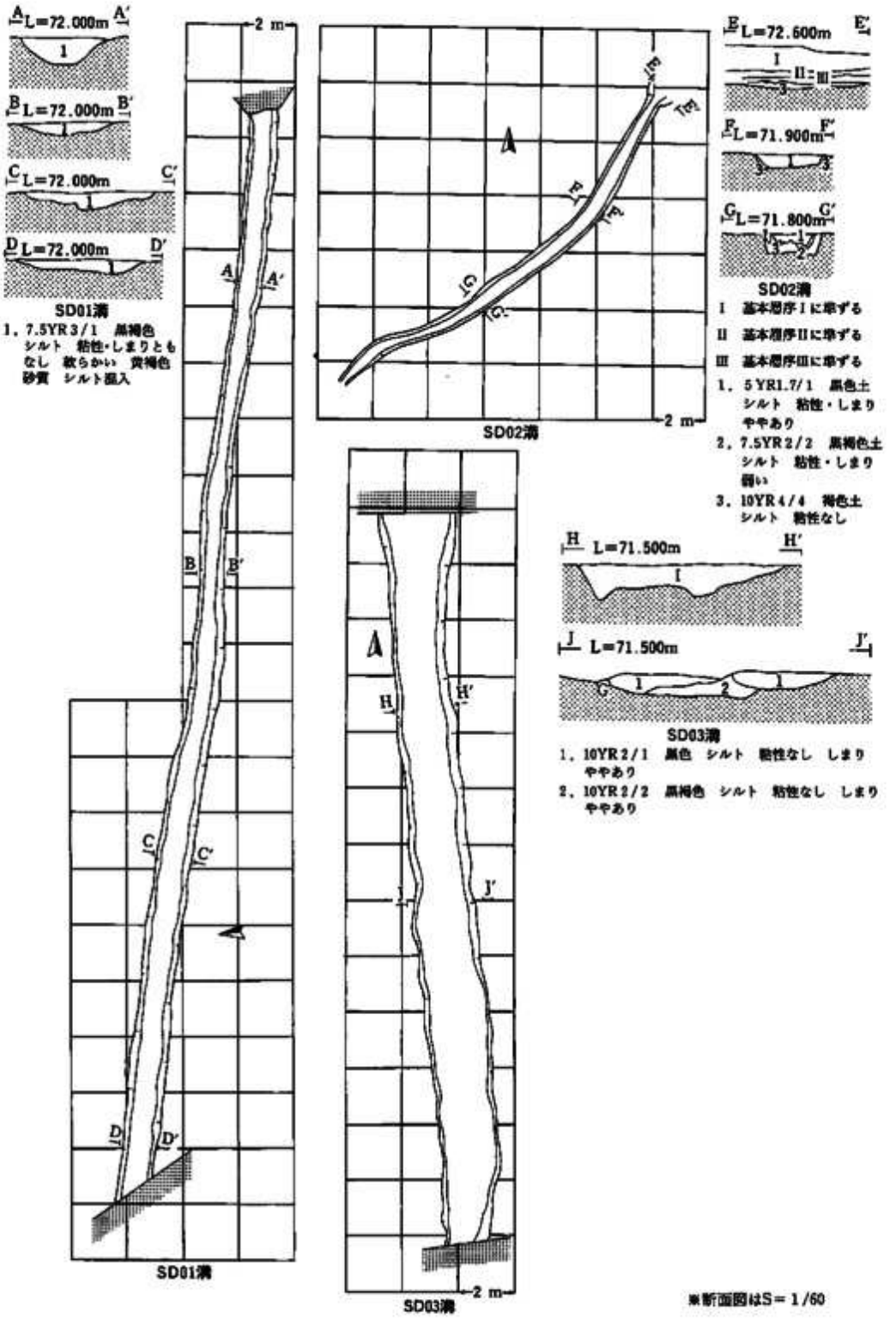
5 は、ほぼ底面に接した状態で出土している。完形に近い施釉陶器の皿である。大きさは、口径は 11.5 cm、底径 5.6 cm、高さ 3.0 cm、厚さ 0.4 cm である。底部には直径 5.6 cm、厚さ 0.6 cm の削り出し高台がつく。体部は緩やかに立ち上がり、中央部からはほぼ垂直ぎみとなり口縁部は内湾し折り返し状の玉縁口縁となっている。高台を除く皿状の部分には全体に釉がかけられ、口縁部では灰白色その他はオリーブ黄色を呈する。胎土は暗灰黄色で、堅く緻密である。内面底には 5 ヵ所に目痕が認められる。

V　遺構外出土遺物

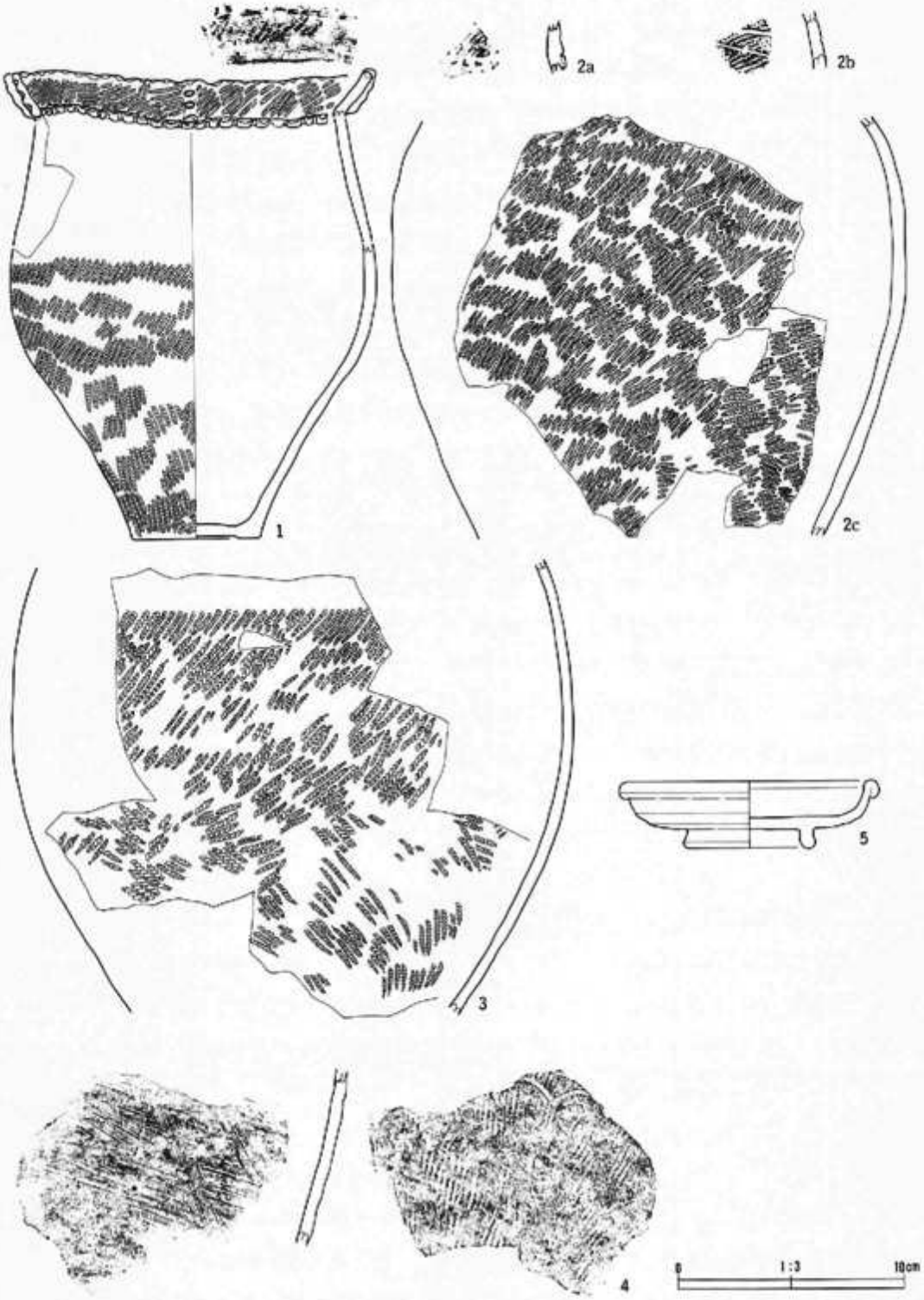
2 ヵ年の調査で遺構外から出土した遺物は、土器が 10 点余りと礫石器 1 点、剥片が 1 点である。そのなかでも、QXII～QXIII グリット付近からややまとまって出土している。

1．土器　（第 11 図、写真図版 4）

6・7 は深鉢形土器の同一個体である。器表面の摩滅が著しいが、太く浅い沈線と磨消縄文により曲線状の文様が施文されている。橙色で胎土に粗砂・小礫を多く含み、焼成もあまり良くない。縄文時代中期末葉頃に比定される。8～10 は同一個体の破片である。壺形土器に近い器形と思われる。太く浅い沈線で平行沈線文と曲線文が描かれ、その他の部分は無文でミガキ調整されている。橙色で焼成は良好であるが、胎土に小礫を含んでいる。後期初頭の時期に近いものと思われる。11 は、深鉢形土器の口縁部付近である。地文として斜行縄文が施文され、入組文部分は縄文が磨り消されている。胎土は粗砂を含み良好とはいえない。縄文時代後期末葉～晩期初頭の時期と考えられる。12～18 は特に文様の施文のない縄文土器である。13・14 は同一個体で、地文として無節の斜行縄文が施文されている。12・15～18 は地文に単節斜行縄文が施文



第9図　SD01～03溝跡



第10図　遺構内出土遺物

されている。明確な時期は特定できないが、胎土に粗砂を多く含むなど本遺跡から出土している縄文時代中期末葉の土器に類似する。

19 は節がこまく条間の狭い斜行縄文が施文された薄手の土器である。灰白色で胎土は精選され、焼成も良好である。SK 03 土坑から出土している弥生土器に類似しており、これらの土器とほぼ同じ時期と考えられる。20 は、ロクロ未使用の土師器甕形土器である。外面はハケメ調整後ヘラケズリ調整、内面はナデ調整がなされている。胎土には小礫を含み、硬質で焼成も良好である。奈良時代か平安時代の土師器と思われるが、他に類似する資料の出土がないため、これのみで詳細な時期決定はできない。

2．石器　（第 11 図、写真図版 5）

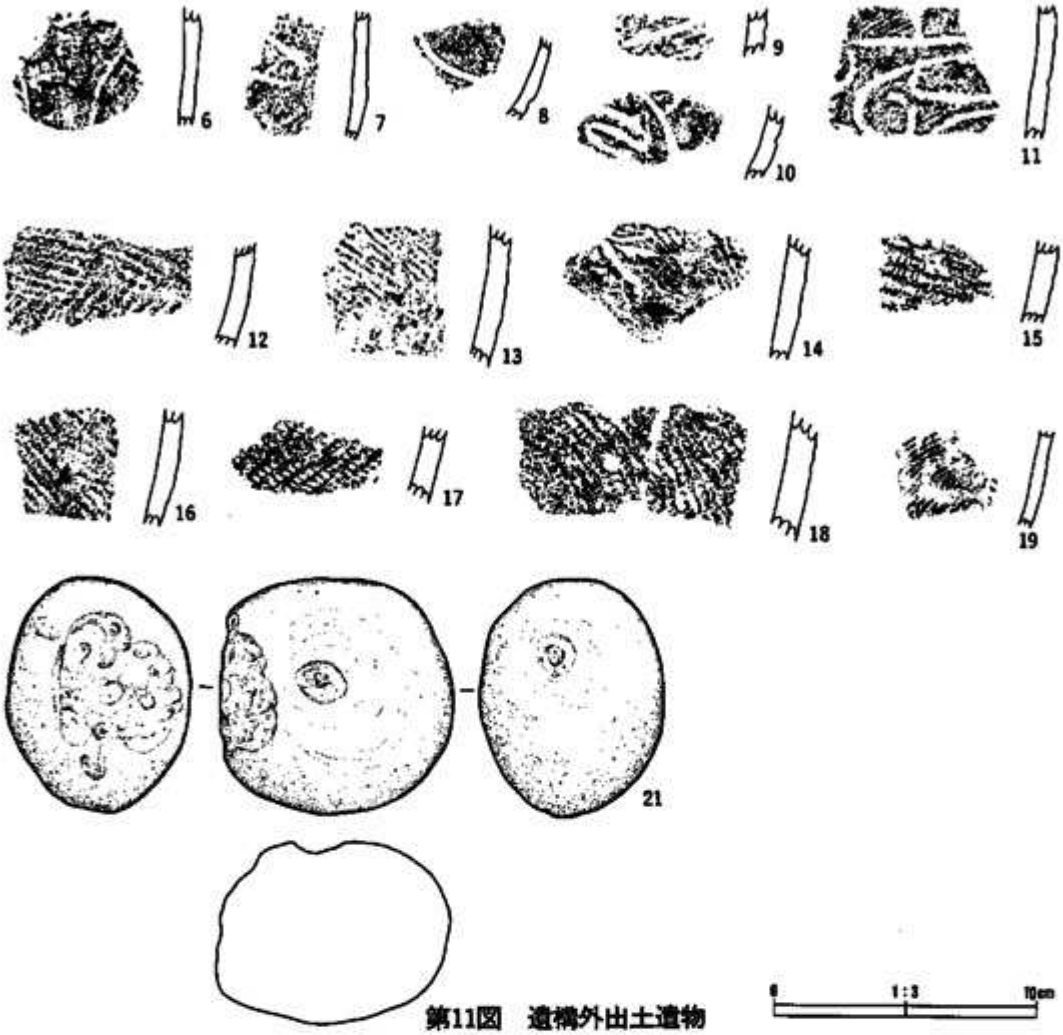
21 は、磨石である。全体に磨面を持ち、表面と長軸方向の側面に凹部分をそれぞれ 1 ヵ所ずつもっている。長軸方向の一方の側面には、敲打痕が観察される。

Ⅵ　まとめ

今回の調査で、掘立柱建物跡 1 棟・溝跡 3 条・土坑 4 基が検出された。

掘立柱建物跡は、特に遺物などは出土しておらずその所属時期については不明である。柱穴内の埋土も非常に軟らかい黒色土で構成されておりごく最近の時期と考えられる。SK 01･02 土坑は、埋土が非常に軟らかい黒色土で構成されている。平面形も不整で壁もあまり明瞭でないことなどから古い時期の遺構とは考えられない。SK 04 土坑は、規模･形状･埋土の堆積状況からみると、落とし穴状遺構と考えられるかも知れない。しかし、広範囲の調査にもかかわらず周辺から類似する遺構が検出されていないこと、周辺の地形などからこの遺構を積極的に落とし穴状遺構にするという根拠には乏しい。SD 01～SD 03 溝跡は、痕跡的ではあるが埋土の下部に砂を少量含んでおり流水溝の可能性も考えられる。SD 01 溝跡は、現在の用水路と平行しており十分にその可能性は考えられる。明治時代初期の東和賀郡上江釣子村の絵図には、この地域に何本かの用水路があり今回の調査で発見された溝跡はこれらのいずれかに相当すると思われる。

SK 03 土坑は唯一所属時期の明確な遺構である。この土坑からは、弥生土器の良好な一括資料が出土している。器形・交互刺突様浮線文・弧状沈線文などの特徴から広義の天王山式土器に含められる土器群である。土器の出土状況は、事実記載の項で述べたが意識的に埋設されたような跡は認められなかった。遺構の上部は削平され埋土の状況は不明であるが、単層で人為的に埋め戻されたことは考えられる。ここでは、県内及び近隣地域に該期の類似遺構を参考にし、遺構の性格・時期的な問題について若干触れることとする。現段階では天王山式土器と北海道



第11図　遺構外出土遺物

土器観察表

番号	地点・層位	器種	部位	文様の特徴・備考	内面調整	写真図版
6	OXII区・II層	深鉢	胴部	同一個体，沈線文，磨消縄文	凹凸	6
7	PXIII区・II層	深鉢	胴部		〃	7
8	QXIV区・II層	壺？	胴部	同一個体，沈線文	ミガキ	8
9	QXIV区・II層	壺？	胴部		〃	9
10	QXIV区・II層	壺？	胴部		〃	10
11	MIX区・II層	深鉢	胴部	入組三叉文，磨消縄文，LR斜行縄文	ナデ	11
12	QXIV区・II層	深鉢	胴部	LR斜行縄文	ナデ	12
13	QXIV区・II層	深鉢	胴部	同一個体 無節斜行縄文	ナデ	13
14	QXIV区・II層	深鉢	胴部		ナデ	14
15	PXIII区・II層	深鉢	胴部	RL斜行縄文	ナデ	15
16	QXIV区・II層	深鉢	胴部	RL斜行縄文	ナデ	16
17	QXII区・II層	深鉢	胴部	RL斜行縄文	ナデ	17
18	QXIII区・II層	深鉢	胴部	LR斜行縄文	ナデ	18
19	MIX区・II層	壺	胴部	LR斜行縄文，弥生土器	ナデ	19
20	PXII区・I層	壺	胴部	外面は刷毛目調整後にヘラケズリ調整	ナデ	20

石器観察表

番号	地点・層位	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	写真図版
21	WXIII区・II層	凹石	輝石安山岩	90	90	66	805	敲打痕有	21

系の土器である後北 C_2・D 式土器との時期的な関係については結論の一致を見ていないが、続縄文時代後半期でも同様の遺構がみられるので類例として加えることにした。

1．弥生時代後半に見られる円形土坑について

①親久保Ⅱ遺跡（岩手県二戸郡一戸町親久保、酒井他：1987）

遺跡は、馬淵川左岸の支流によって開析をうけた標高 222～210 m の丘陵の北斜面山腹に立地している。直径約 100 cm で平面形が円形、深さ 20 cm ほどの土坑が 5 基尾根状の斜面部に集中して検出されている。遺構の上部は失われている可能性があり、5 基のうち 3 基からは弥生時代終末頃の撚糸文を主体に施文された土器群が出土している。そのうちの 1 基には、内部に小礫が多数入った埋設土器が発見されている。

②中長内遺跡（岩手県久慈市長内町、千葉：1988）

遺跡は、種市段丘上の南東から北西に下る標高 31～42 m の斜面上に立地している。直径が 115 cm・深さが 45 cm で、平面形は円形である。奈良時代の竪穴住居跡の床面の下位から検出されており、構築時の状態を留どめていないようである。遺構内の埋土からは、後北 C_2・D 式土器と小礫が 19 点出土しているが、礫の出土状況については不明である。この遺構とは直接的なかかわりを持たないが、周辺からは後北 C_2・D 式土器と弥生時代後半の天王山式系土器の破片が出土している。

③上野 B 遺跡（岩手県二戸郡一戸町字上野、小田野・高田：1983）

遺跡は、馬淵川東岸の標高 190 m ほどの低位段丘面の先端部に立地している。弥生時代の竪穴住居跡 4 棟のほかに、開口部 92 cm×80 cm・深さ 10～20 cm の円形の土坑が 1 基発見されている。土坑からは、連続山形沈線文が施文された小田野編年第Ⅲ期の特徴を持つ甕形土器が 1 点出土している（小田野：1987）。

④蛍沢遺跡（青森県青森市大字駒込字蛍沢、葛西：1979）

遺跡は、標高 35 m の舌状台地の基部に立地している。長径 115 cm×短径 100 cm で、深さ約 25 cm の円形の土坑が 1 基発見されている。土坑の底面からやや浮いた状態で、天王山式に属する甕形土器が 1 点出土している。埋土の中位に多量の炭化物の堆積層が認められる。遺構の性格として、再葬墓が考えられている。

⑤大面遺跡（青森県南津軽郡碇ヶ関村古懸字大面、小笠原他：1980）

遺跡は、標高 200 m の舌状台地上に立地している。長軸 192 cm×短軸 126 cm・深さ 102 cm の楕円形状を呈し、底面のほぼ中央に小ピットを持つ土坑が 1 基検出されている。埋土は人為堆積を示し、埋土上部には焼土層及び焼土粒を多量に含む層が形成されている。埋土の上面及び堆積土から、弥生時代終末期に属する土器とアメリカ式石鏃 3 点が出土している。焼土につ

いては現地性であることが指摘され、儀礼的な意味を持つものと考えられ土壙墓という性格付けを行っている。

⑥大岱Ⅰ遺跡（秋田県鹿角郡小坂町小坂字大岱、大野他：1984）

遺跡は、標高 230 m 前後の小坂川右岸の段丘上に立地している。弥生時代の 2 基の土坑が遺跡のほぼ中央部から単独で検出されている。そのうちの SK 06 土壙は直径 150 cm・深さ 20 cm の規模を持つ円形プランの土壙である。埋土の上部には、微量の焼土粒・炭化物が含まれた層がある。土壙の中央部で底面からやや浮いた状態で広義の天王山式の深鉢形土器が 1 点出土している。

⑦はりま館遺跡（秋田県鹿角郡小坂町小坂字下モ上ハ山、栄他：1990）

遺跡は、鹿角盆地の北側を南流する小坂川右岸の段丘の開析谷からのびた標高 210～215 m の沢頭部分に立地している。弥生時代終末に属する 7 基の土坑が検出されている。円形プランの土坑が主体である。埋土上面に現地性の焼土が形成された例や、人為的に埋め戻された例がある。土坑内からは弥生時代終末期の土器が出土している。これらの多くの土坑は、土壙墓と考えられている。なお、遺構に共伴したものではないが、遺跡からは後北 C_2・D 式土器も出土している。

⑧西野幌 12 遺跡（北海道江別市西野幌、高橋他：1988）

遺跡は、標高 18～30 m の東に緩やかに傾斜した台地の平坦面縁辺に立地している。続縄文期後半を中心とした 108 基の土坑が検出されている。直径が 70～100 cm を主体とした円形タイプのものが大半を占め、楕円形を呈するものは 1 割程度である。遺構内から出土する土器は後北 C_2・D 式土器が多く、なかには東北地方北半の弥生時代終末期に位置付けられる羽状の撚糸文が施文された土器も出土している。埋土に焼土が堆積した土坑も数例ある。土坑の大半が上部を削平されており、本来は焼土を伴った土坑がより多く存在した可能性がある。墓壙の可能性が指摘されている。

⑨元江別 10 遺跡（北海道江別市、稲垣：1989）

遺跡は、標高 20 m 前後の平坦な台地上に立地している。円形の土坑が約 60 基検出されており、このうちの大多数は続縄文時代後期の遺構とされている。直径 80 cm 前後、深さ 30 cm 前後の規模を持つ土坑が多い。坑底に礫を伴う例が 26 例（44%）、埋土最上面ないしは埋土上部に焼土を伴う例が 32 例（54%）である。遺構内から出土する土器はそれほど多くはなく、出土する場合でも破片が圧倒的である。後北 C_2・D 式土器が多い。遺構外からは、後北 C_2・D 式土器に共伴して東北地方北半の弥生時代終末期の土器が出土している。

これらの類例をまとめると以下のようになる。

・規模にはややばらつきがあるものの、直径 100 cm 前後・深さ 50 cm 前後で円形プランを基調とするものである。
・埋土の最上面ないしは上半に現地性の焼土や炭化物を伴うことが多い。あるいは土坑の周囲に焼土遺構が存在したり、焼土遺構と一部重複したりする例がありこの種の土坑は焼土と密接なかかわりがある。
・埋土は、人為的に埋め戻された状況を示す場合が多い。
・土坑内からは底面からやや浮いた状態で土器が破片で出土することが多く、複数個体分出土する場合もある。
・時期的には、弥生時代後期～終末頃（天王山式およびこれに後続すると思われる土器群）・続縄文時代後半（後北 C_2・D 式土器）の所産である。
・遺構の性格としては土壙墓と考えられる例が多く、焼土や炭化物の存在は葬送儀礼に深くかかわりをもつものと考えられる。

本遺跡で検出された SK 03 土坑も上記の要素の多くを満たしており、土壙墓の可能性が非常に高い。しかし、土坑の規模からは一次埋葬は考えがたく土器の存在と合わせると二次埋葬のための施設と考えられる。同種の遺構は、東北地方北半から北海道にかけて発見される場合が多く、久慈市中長内遺跡では後北 C_2・D 式土器が土坑内から出土していること、本遺跡の SK 03 土坑から出土している天王山式土器に北海道の続縄文式土器の影響が認められることなどから、このような遺構は系統的には続縄文文化の枠のなかで理解されてよい遺構かもしれない。

今後、東北地方北半の土器と北海道系土器との時期的な問題、さらに岩手県永福寺山遺跡（武田：1975）・秋田県寒川Ⅱ遺跡（小林：1988）で発見されている楕円形状の土坑との関係を考慮しなければならないであろう。

2．SK 03 土坑出土の弥生土器について

土坑墓と考えられる SK 03 土坑からは、少なくとも 4 個体分の甕形土器の一括資料が出土している。遺構の性格上、出土している土器群は必ずしも該期の器種構成を反映しているとは考えられないが、甕形土器は弥生時代を通して普遍的に存在する器種であり、器種組成の中核をなすものである。

（1）本遺跡出土の土器群の持つ特徴

〈器形〉

全体の形状を知りえた資料は 1 点しか出土していない。1 は、胴部最大径をほぼ中央部に持ち、それより上半部（肩部～頸部）は内傾し口縁部は受口状に外反している。下半はすぼまるように底部にいたる。口縁部は平縁で 5 個の小突起を持ち、底部はやや上げ底風である。2 は、

最大径を肩部付近に持つと思われる。詳細については不明である。3も、1と同様の形状を呈すると思われる。

〈文様帯構成〉

口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部（上半・下半）文様帯が認められる。1は、口縁部文様帯と頸部文様帯が、交互刺突様浮線文によって区画されている。口縁部文様帯には縄文が施文され、さらに刺突の施された縦の隆帯が5本貼付される。口縁部内面にも同様に縄文が施文される。頸部文様帯及び胴部上半文様帯には無文帯が形成され、胴部下半文様帯には縄文が施文される。2も1と同様、交互刺突様浮線文によって口縁部文様帯と頸部文様帯が区画される。口縁部文様帯には縄文が施文され、頸部文様帯には無文帯、その下には（胴部上半文様帯）さらに複数の沈線により文様帯が形成され、胴部下半文様帯には縄文が施文される。3では胴部上半文様帯が無文帯、胴部下半文様帯には縄文が施文される。4は胴部下半の破片であり、胴部下半文様帯は縄文を地文として沈線により下向きの連弧文が描かれる。

〈文様〉

文様要素として、交互刺突様浮線文・沈線文・縄文が認められる。

交互刺突様浮線文としたものは、口縁部文様帯と頸部文様帯を区画するさいに使用されている。一瞥すると従来まで言われているような交互刺突文であるが、詳細に観察するとこれは交互には刺突されていない。次のような施文方法が想定される。2本の平行沈線を引く（特に上の線は太くかつ深く）、その際施文具は器面に垂直に当てられるのではなく斜めに当てられる→粘土のまくれが生ずる→この粘土のまくれに対して棒状工具を縦にして刺突と同時に器面を強く押し付ける→押し付けた結果、縦に刻目状の刺突文が出来ると同時に、粘土のまくれが平行沈線の空間を埋め、上から突き刺したような袋状の刺突が生ずる。その結果、2方向からつかれたような立体的な交互刺突という錯覚を生み出している。同様な手法は口唇部でもなされている、上記のような例も含め、交互刺突文とよばれる文様要素にはさまざまな名称（刺突波状文・浮線波状文・浮文状波文等）や施文方法がある。ここでは、典型的な交互刺突文や所謂“交互崩れ”と呼ばれるものと区別して、交互刺突様浮線文という用語を使用する。

沈線文は、細く浅い。判然としているのは、下向きの連弧文である。この下向きの連弧文は、平行沈線文と同時に胴部下半に施文される。また、2の破片から複数の沈線により頸部付近に文様がされる。モチーフ・文様の展開の仕方については不明であるが、3本以上の沈線が使用されており、重層する弧状沈線文あるいは重菱文が施文されていた可能性が考えられる。

縄文は、口縁部文様帯の内外面及び頸部付近の無文帯を除いた体部全体に施文される。すべて2段単節のLRである。胴部付近は整然と横回転の斜行縄文が施文されるが、胴部下半になると回転方向を変えて条の方向を変化させたり重複させたりしている。

〈胎土・焼成・その他〉

1・2・4は、灰白色できめのこまい精選された胎土が使用されている。焼成も良好であるが、やや軟らかい感じを受ける。3点とも内面がナデ調整されている。3は、黄褐色で胎土には粗い粒子が含まれる。全体に硬質であり、内面は指頭で調整したような凹凸が認められる。すべて器壁が薄く、外面には煤が付着している。

（2）本土器群の編年的位置付け

岩手県の弥生土器の編年は、伊東信雄・江坂輝彌・鳥畑寿夫等によりその基礎的な作業がなされてきた（伊東：1974、江坂：1953・1955、鳥畑：1955）。これらの業績をふまえ、小田野は『岩手の土器』の中で大きく3期の変遷を想定した（小田野：1982）。その後、上野遺跡・湯舟沢遺跡など竪穴住居跡を含んだ良好な集落遺跡が発掘調査され、これらの成果をもとに、小田野は細分化を推し進め、5期6段階の変遷を提唱した（小田野：1987）。本稿でも、この小田野編年に準拠し県内の他遺跡との比較を通して、本遺跡出土の土器群の時間的位置付けを行ってみたい。

口縁部が外反し、口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯が明確に分離し、特にすぼまるような無文の頸部文様体を持つ例は、一戸町上野遺跡（高田：1985）・水沢市常盤遺跡（伊東：1974）・江刺市兎Ⅱ遺跡（高橋他：1979、佐藤：1990）・大船渡市関谷洞窟遺跡（小田野：1982）などに見られる。

口縁部の内面に縄文が施文される例は少なく、陸前高田市山崎遺跡（小田野・佐藤：1984）・滝沢村湯舟沢遺跡（桐生他：1986）の湯舟沢Ⅲ類土器・上野遺跡に散見される。このなかでも、山崎遺跡の場合は沈線文と併用されている。

本遺跡出土の2の土器に見られる複数の沈線による施文はモチーフは不明であるが、前述したように重層する弧状沈線文あるいは重菱文の可能性が考えられる。施文部位などを考慮すると、常盤遺跡・湯舟沢遺跡第Ⅲ群土器に近いと思われる。また、下向きの連弧文は常盤遺跡に見られるが、常盤遺跡の場合は頸部文様帯・胴部上半文様帯にみられ、本遺跡の場合とはやや異なっている。胴部下半、底部付近に弧状文が施文された例は湯舟沢Ⅲ類土器にみられるがこれは撚紐の圧痕である。施文部位に着目すると、口縁部文様帯や頸部文様帯への施文は小田野編年の第Ⅳ期に多く、胴部下半に文様が展開するのは第Ⅲ期の方に多く見られる特徴である（小田野：1987）。

交互刺突様浮線文は、上述したように典型的な交互刺突文からは逸脱したものである。このような立体的な交互刺突様浮線文は、兎Ⅱ遺跡・関谷洞窟遺跡・常盤遺跡で出土しており、これらの遺跡では口縁部に集約されて施文される傾向にある。これに対し、湯舟沢遺跡第Ⅲ類土器

のなかには本遺跡と同様に口縁部文様帯と頸部文様帯の境に施文されており、施文部位だけから考えると湯舟沢遺跡の例に近い。

口縁部に刺突のある隆帯あるいは単に隆帯だけが貼付された例は、県内の出土例にはまったくないものである。これと類似する例は、青森県発茶沢(1)遺跡（奈良他：1989）・同沖附(1)遺跡（坂本他：1984）・同上尾駮(2)遺跡（奈良他：1986）、宮城県川口抑口遺跡（興野：1970、須藤：1984・1990、太田：1990）・同大穴遺跡（興野：1978）出土土器のなかに僅かに見られる程度であり、東北地方の弥生土器には一般的にみられる手法ではない。青森県内の出土例では、貼付隆帯の土器を含む土器群は、天王山式土器に併行する発茶沢(1)遺跡例を除き、他は念仏間式・大石平遺跡第Ⅰ群土器など天王山式土器に比定される交互刺突文系土器の直前の土器群とともに出土している。一方、宮城県大穴遺跡出土の２例は、時期的には天王山式土器に後続する踏瀬大山式土器として理解されている。また、川口抑口遺跡出土例は須藤編年では弥生時代終末期の第Ⅵ期に位置付けられている。特に、この土器は器形の点ではやや異なるが、青森県発茶沢(1)遺跡第Ⅱ群（天王山式併行）土器と文様帯の構成、胴部に展開する工字文風の沈線文など類似する点も認められる。以上のことから、東北地方においては口縁部に隆帯を貼付する例は、時間的には天王山式土器および天王山式土器の前後の土器群のなかに存在している。関東地方の久ヶ原式土器のなかにも同様な手法が認められるが、現段階ではこれとの直接的な関連は見いだせない。むしろ、これら縦の隆帯は、久慈市中長内遺跡・盛岡市永福寺山遺跡出土の後北式土器の存在や青森県内での出土例を考慮すると、東北地方北半の土器・北海道の続縄文土器のなかにその系譜が求められる可能性も考えられる。

岩手県内で天王山式系土器と呼ばれている土器のなかには、所謂“天王山式土器”のメルクマールとされる交互刺突文という文様要素だけに着目すれば、少なくとも３タイプ存在すると考えられる。Ａタイプ：兎Ⅱ遺跡・常盤遺跡・関谷洞窟遺跡・墳館遺跡（斎藤他：1980）に代表され、肥厚した口縁部を中心に立体的かつ肉彫的な交互刺突様浮線文が表出されるタイプである。バリエーションに富み、交互刺突という概念からは逸脱するが、典型的な交互刺突文が形成される一過定と考えられる。口縁部に集約され、口縁と平行して一周する。本遺跡の交互刺突様浮線文も施文部位は異なるものの、手法的にはこのタイプに属する。Ｂタイプ：湯舟沢遺跡Ⅲ類土器・盛岡市繋Ⅵ遺跡（工藤他：1980）に代表され、典型的な交互刺突文である。立体さを失い平行沈線文の間に整然とした、平面的な交互刺突文が施文される。口縁部及び頸部文様帯と、口縁部文様帯の境に口縁と平行して施文される場合が多い。Ｃタイプ：所謂“交互崩れ”と称されるタイプである。交互刺突文は、Ｂタイプのように平行沈線文と併用され刺突される。しかし、Ｂタイプのような流麗な小波状・整然さは全く失われ、刺突の仕方にも規則性に欠けている。以前まで口縁と平行して施文されていたものが、この原則が崩れ口縁に対して

斜位に施文されるものも出現し、施文部位も胴部上半文様帯にまで拡大する。これらの崩れ交互刺突文は、以前まで見られなかった頸部に括れのない形状の甕形土器や縦走する縄文や撚糸文が施文される土器群に施文される例が多い。宮古市長根Ⅰ遺跡(玉川：1990)・蜂ヶ沢遺跡(武田：1965)・一戸町親久保Ⅱ遺跡の一部・竹林遺跡（高橋：1986）・野田村中平遺跡（草間：1966)・盛岡市一本松遺跡（武田：1978)・永福寺山遺跡（武田：1978）などがある。このように交互刺突文には3タイプがあり、これがA→B→Cという時間的推移を反映していると考えられる。しかも、BタイプとCタイプの間には土器の器形・地文の施文という点で一つの画期が読み取れる。さらに、Cタイプ段階と一部重複するもののCタイプ段階以降には、交互刺突文の消失段階の初期と考えられる赤穴式と称されるものに相当する一戸町親久保Ⅱ遺跡の一部・小井田Ⅳ遺跡（栃沢他：1983)・上野遺跡第Ⅱ群土器・岩泉町赤穴洞窟（江坂：1953)・銭神沢遺跡（武田：1978)・滝沢村参郷森遺跡（武田：1978)・岩手町新道平遺跡（草間：1976）のような土器群が後続していくと思われる。

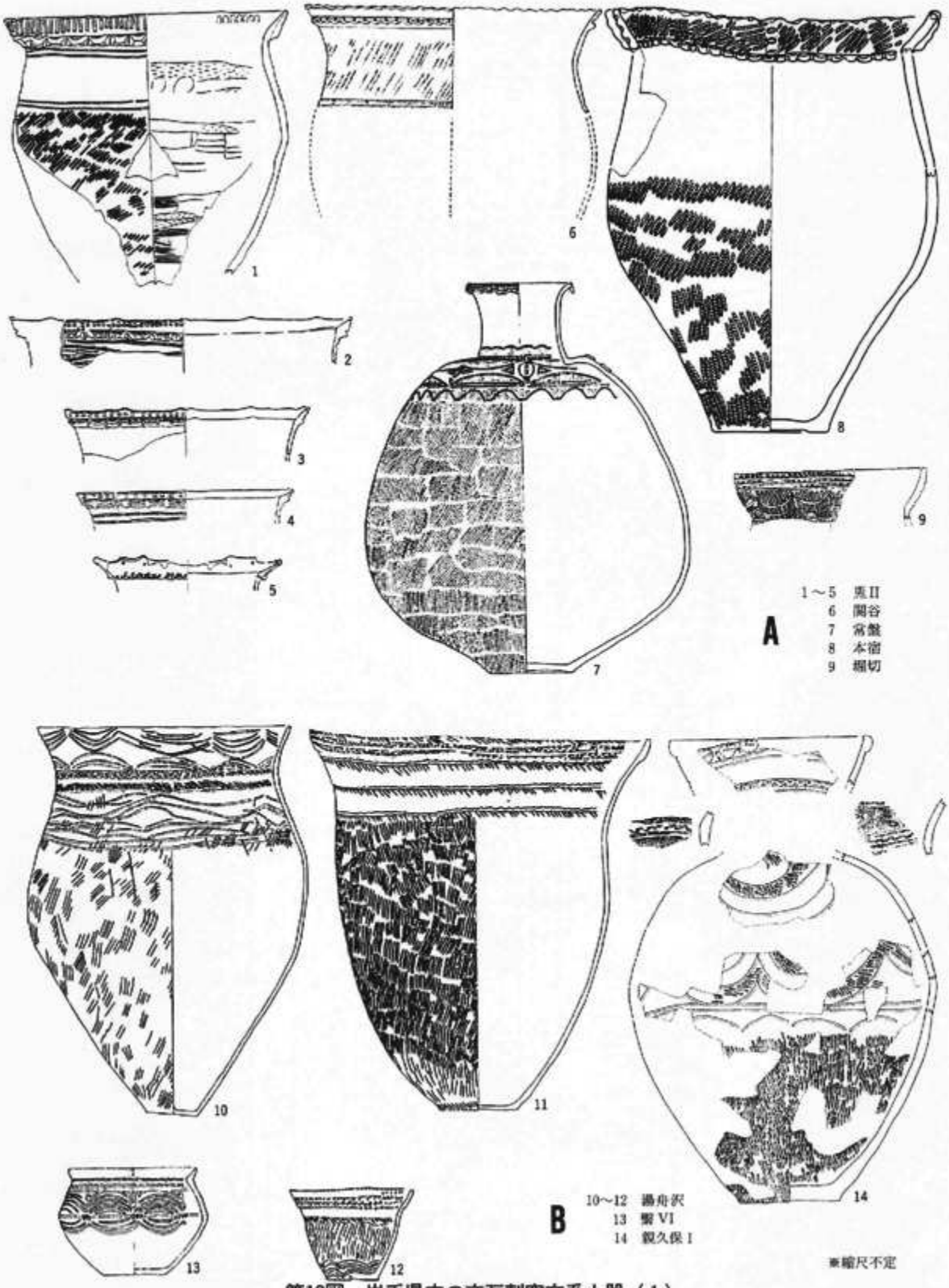
本遺跡出土のこれらの土器群は、小田野編年第Ⅲ期の要素を若干残しながらも、多くの点で第Ⅳ期の土器群との共通性を持っており、広義の天王山式土器に属する土器群である(小田野：1987)。更に時間的な枠を狭めると、天王山式土器の初期と考えられている兎Ⅱ遺跡・常盤遺跡出土の土器群に包括されるもののこれらよりは新しい要素を持っている。また、撚糸文などがみられないことから湯舟沢遺跡Ⅲ類土器よりは古く位置付けられるであろう。なお、籾痕土器が出土しており、天王山式期においては本県では兎Ⅱ遺跡・湯舟沢遺跡についで3例目となる。

最近、天王山式土器の主要なメルクマールである交互刺突文の成立に関して、その発生を兎Ⅱ遺跡出土の土器群に求めようとする意見がある（佐藤：1990)。交互刺突文には前述したように様々な類型があり、兎Ⅱ遺跡の土器群もこの一類型でありこれを初源期に位置付けることについては妥当と考えられる。今後、兎Ⅱ遺跡などにみられるようなダイナミックな交互刺突様浮線文がいかなる系譜のもとに成立したか課題となると思われる。一方には、和井内東遺跡・上野B遺跡土器群の平行沈線文・小刻みな波状沈線文・刺突文に求めようとする考えがあるが（石川：1990)、他型式の介在を考えなければかなりの飛躍があるように思われる。また、上野B遺跡土器群を交互刺突文成立に関与する土器と考え、これらに長根Ⅰ・湯舟沢遺跡が後続していくのであれば（相沢：1990)、兎Ⅱ・常盤・本宿遺跡のような交互刺突様浮線文が入り込む余地がなくなる。今後、和井内東・上野B遺跡のような土器群と兎Ⅱ遺跡・常盤遺跡の土器群の関係を吟味する必要があると思われる。

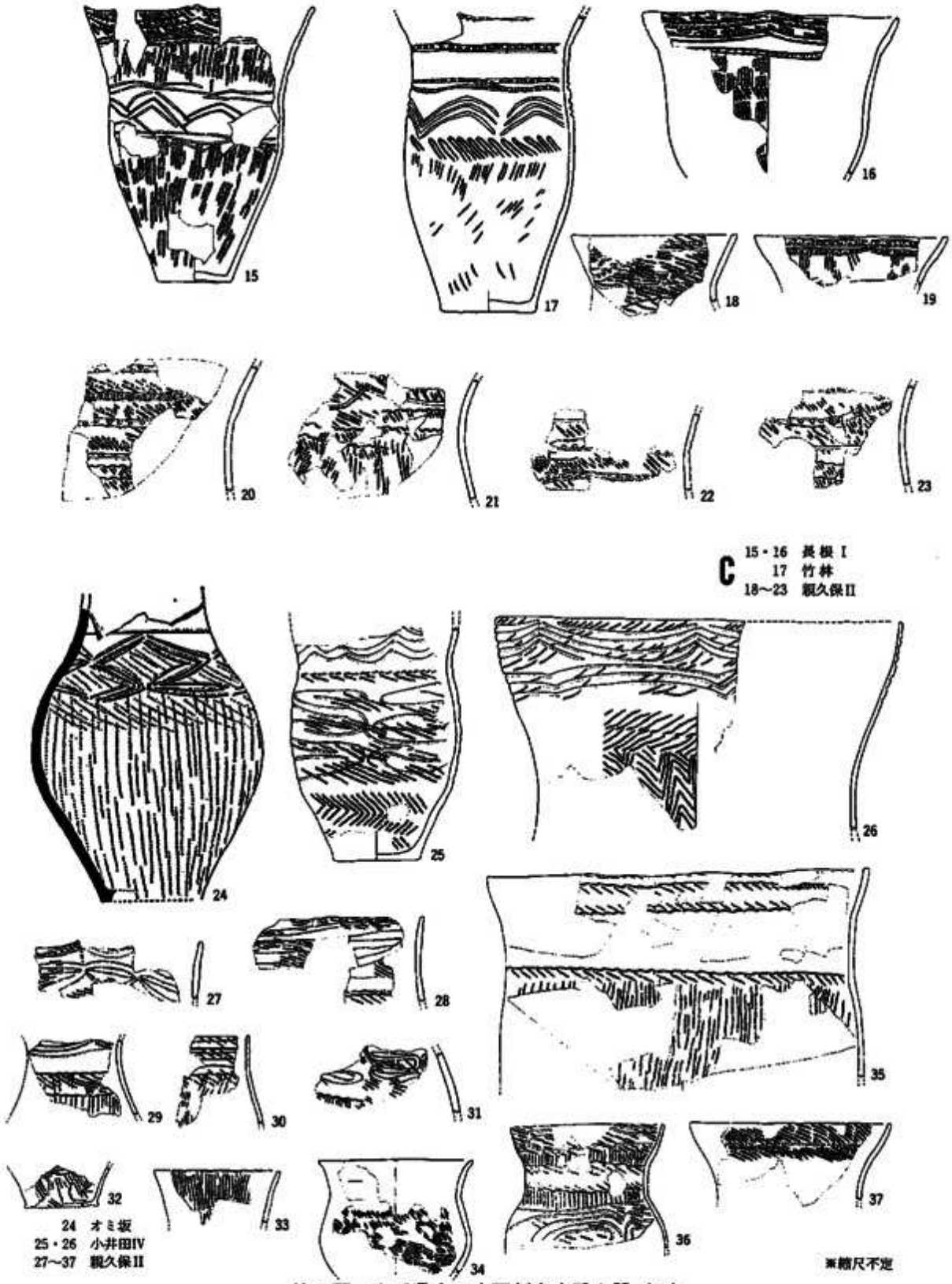
〈引用・参考文献〉

相沢清利（1990）「天王山式土器の成立と展開」“天王山式期をめぐって”の検討会記録集　弥生時代研究会
石川日出志（1990）「天王山式土器編年研究の問題点」　北越考古学第3号　北越考古学研究会
稲垣和幸（1989）『元江別10遺跡』　北海道江別市教育委員会
伊藤信雄（1974）「水沢地方の弥生式土器」　水沢市史Ⅰ
岩手県企画開発室（1976）『北上山系開発地域土地分類基本調査』
江坂輝彌（1953）「岩手県小本川流域の洞窟遺跡」　貝塚45
江坂輝彌（1955）「日本石器時代の文化5・6」　奥羽史談5－5、6－1
太田昭夫（1990）「宮城県における天王山式期の現状と課題」“天王山式期をめぐって”の検討会記録集　弥生時代研究会
大野憲司（1984）「大岱Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書X』秋田県教育委員会
大沼忠春（1982）「道央地方の土器」　縄文文化の研究6
小笠原幸範他（1980）『碧ヶ関大面遺跡発掘調査報告書』　青森県教育委員会
岡田康博（1984）「青森県内の弥生時代終末期の土器について」　遺址No.4
小田野哲憲他　『岩手の土器』　岩手県立博物館
小田野哲憲・高田和徳（1983）「上野B遺跡」『一戸バイパス関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』　一戸町教育委員会
小田野哲憲・佐藤政彦（1984）『山崎遺跡発掘調査報告書』　陸前高田市教育委員会
小田野哲憲（1985）「岩手県新里村和井内東遺跡の弥生式土器」『日高見国』
小田野哲憲（1986）「湯舟沢遺跡3区の弥生式土器」『湯舟沢遺跡』　滝沢村教育委員会
小田野哲憲（1987）「岩手の弥生式土器編年試論」　岩手県立博物館研究報告第5号
小田野哲憲（1990）「岩手県における天王山式期の現状と課題」“天王山式期をめぐって”の検討会記録集　弥生時代研究会
葛西勝他（1979）『蛍沢遺跡』青森市蛍沢遺跡発掘調査団
興野義一（1978）「宮城県大穴遺跡の弥生式土器」　北奥古代文化No.10号　北奥古代文化研究会
草間俊一（1966）「岩手県出土の弥生式土器一、二例」　岩手史学研究第48号　岩手史学会
草間俊一（1976）『岩手町史』　岩手町史刊行会
工藤利幸・上野猛（1980）『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』　岩埋文セ13集
小平忠孝・栃沢満郎（1983）『小井田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』　岩埋文セ69集
小林克他　『寒川Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　秋田県教育委員会
斎藤淳他（1980）「墳館遺跡」『東北縦貫自動車道関連文化財調査報告書Ⅲ』　岩手県教育委員会
栄一郎他（1990）『はりま館遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会
酒井宗孝・平井進（1986）『沼久保遺跡発掘調査報告書』　岩埋文セ109集
酒井宗孝　1987　『親久保Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』　岩埋文セ116集
坂本他（1984）『沖附(1)遺跡』青森県教育委員会
佐藤二郎（1982）「和賀川流域の地形について」岩手県文化財調査報告書第71集
佐藤信行（1976）「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』　東北史学会
佐藤信行（1984）「宮城県内の北海道系遺物」『宮城の研究Ⅰ』清文堂
佐藤信行（1990）「天王山式土器の成立と展開」“天王山式期をめぐって”の検討会記録集　弥生時代研究会
須藤隆（1984）東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究Ⅰ』清文堂
須藤隆（1990）「東北地方における弥生文化」『考古学古代史論攷』
高田和徳（1985）『上野遺跡』一戸町教育委員会
高橋和樹他（1988）『西野幌12遺跡』（財）北海道埋蔵文化センター
高橋信雄（1979）「兎Ⅱ遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡調査報告書』　岩埋文セ8集
高橋文明（1980）「江釣子遺跡群」　一昭和54年度発掘調査報告一　江釣子村教育委員会
高橋文明（1989）「江釣子遺跡群」　一昭和63年度発掘調査報告一　江釣子村教育委員会

高橋文明（1989）「北鬼柳地区遺跡群詳細分布調査報告」江釣子村教育委員会
高橋與右衛門（1986）『堀切・竹林遺跡発掘調査報告書』岩埋文セ 107 集
武田良夫（1965）「宮古採集の弥生式土器」　奥羽史談No.43　奥羽史談会
武田良夫（1975）「シンポジュウム北奥の古代文化の諸問題」『北奥の古代文化』　学生社
武田良夫（1978）「岩手県における弥生式土器について」　考古風土記第 3 号
玉川英喜（1990）『長根Ⅰ遺跡発掘調査報告書』　岩埋文セ 146 集
千葉啓蔵（1988）『中長内遺跡発掘調査報告書』　久慈市教育委員会
坪井清足（1953）「福島県天王山遺跡の弥生式土器」　史林 36－1
鳥畑寿夫（1955）「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」　上代文化No.25
奈良昌毅他（1986）『上尾敲(2)遺跡』　青森県教育委員会
奈良昌毅他（1989）『発茶沢(1)遺跡』　青森県教育委員会
※ 岩埋文セは岩手県埋蔵文化財センターの略



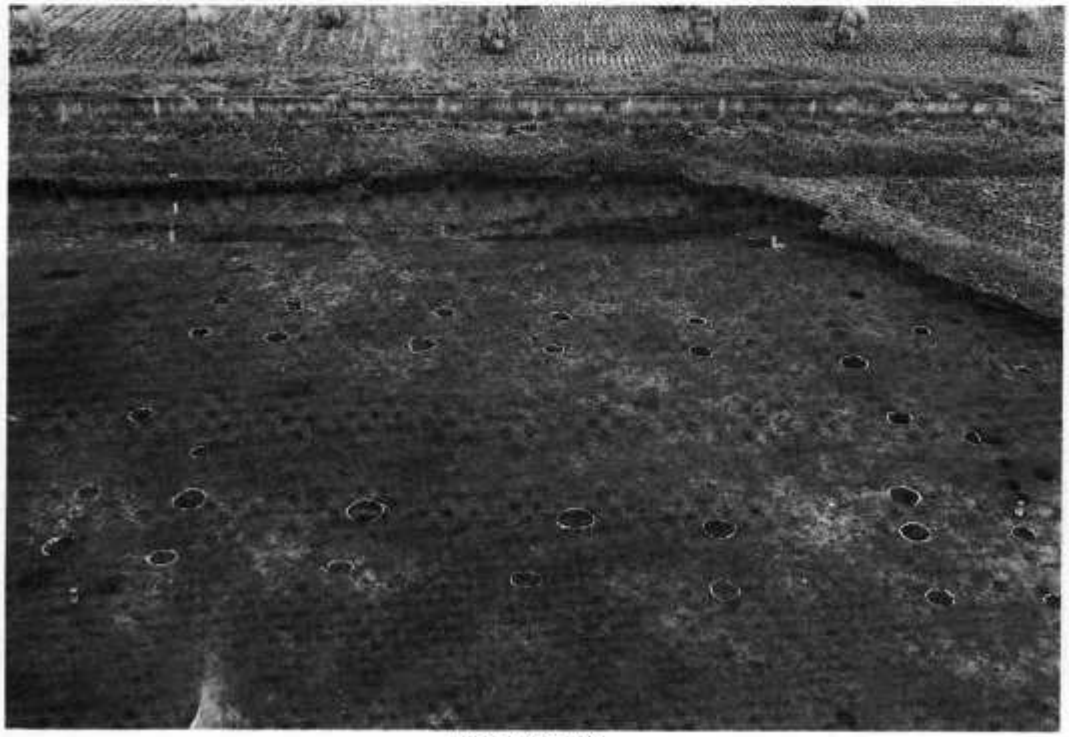
第12図　岩手県内の交互刺突文系土器（1）



第13図 岩手県内の交互刺突文系土器（2）

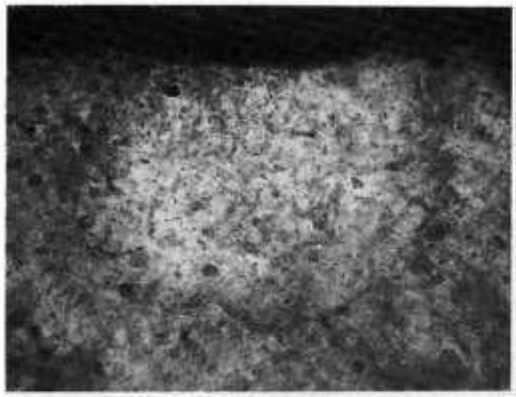
写　真　図　版

調査風景



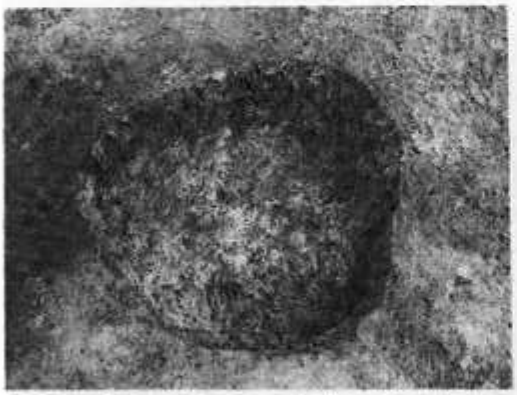
SB01掘立柱建物跡

写真図版１　調査風景・SB01掘立柱建物跡



SK01土坑平面・断面

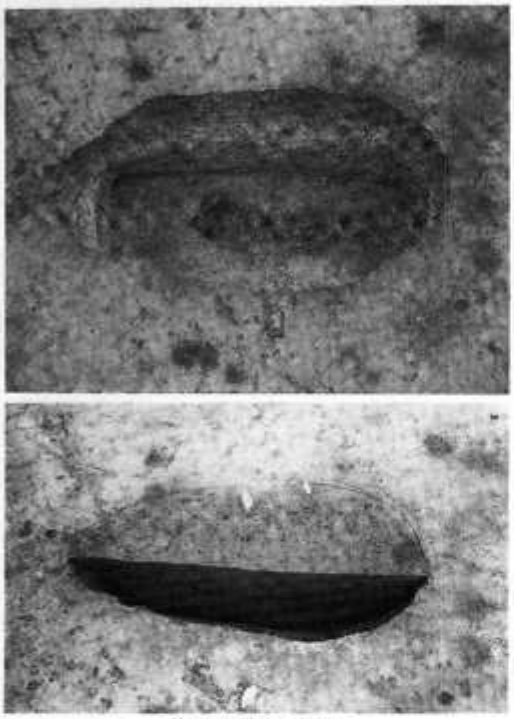
SK02土坑平面・断面



SK03土坑弥生土器出土状況

SK03土坑平面・断面

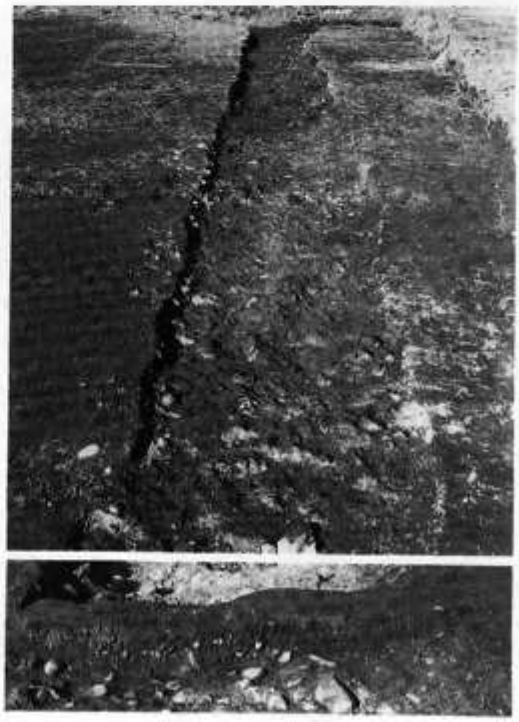
写真図版 2　SK01～03土坑



SK04土坑平面・断面

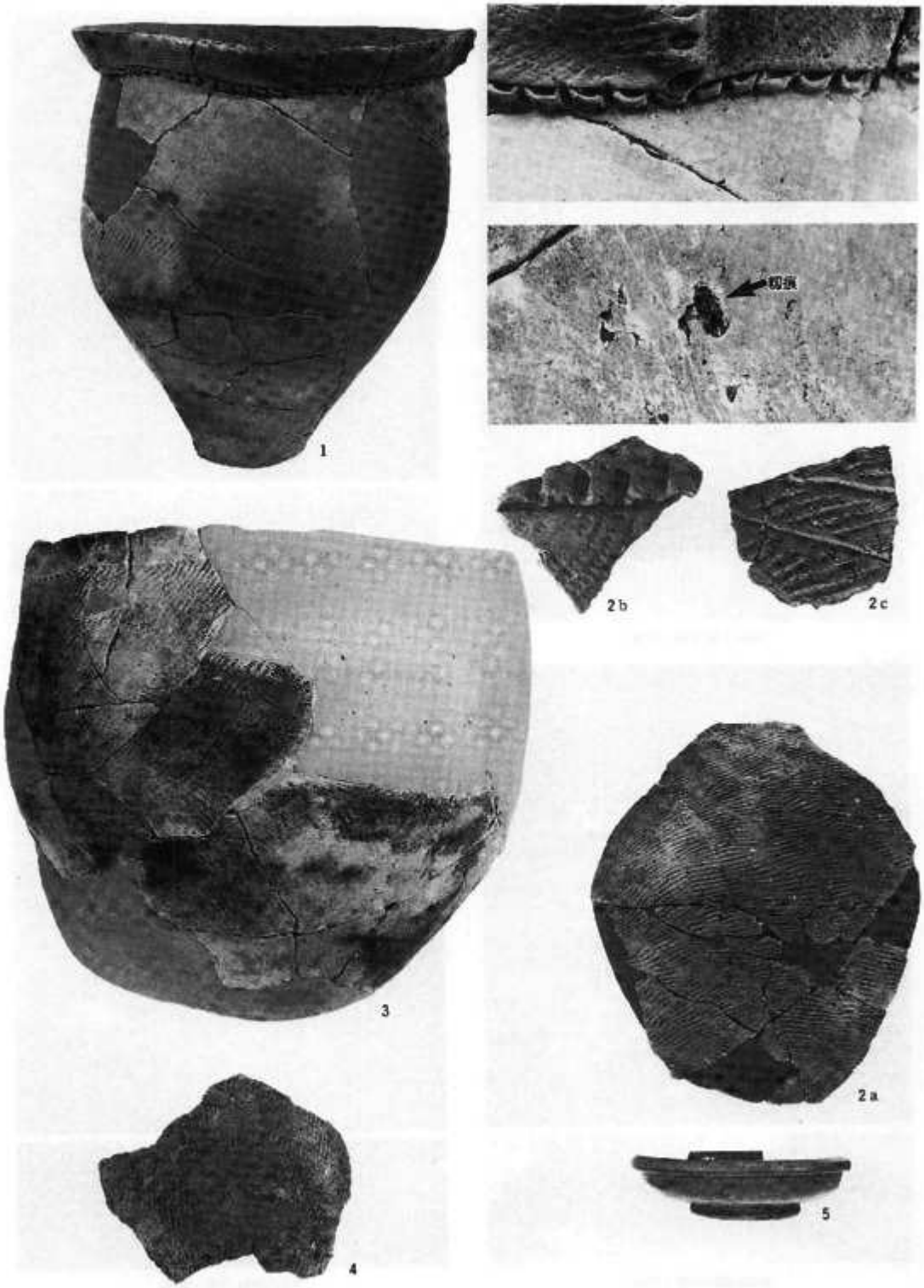
SD01溝跡平面・断面

SD02溝跡平面・断面

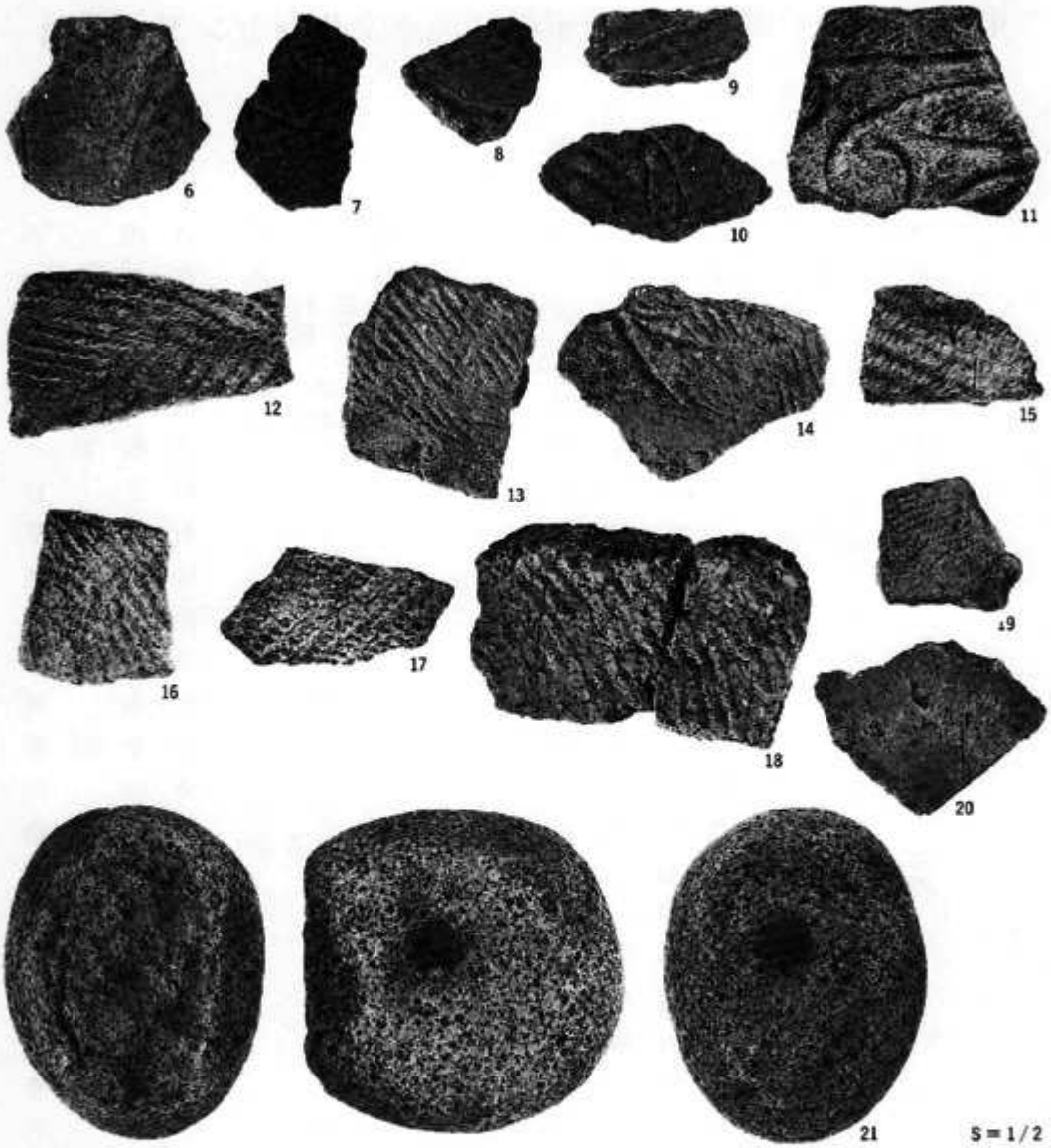


SD03溝跡平面・断面

写真図版3　SK04土坑・SD01～03溝跡



写真図版４　遺構内出土遺物



写真図版 5　遺構外出土遺物

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長	小笠原喜一
副所長	高橋敬明

[管理課]

管理課長(兼)	高橋敬明
課長補佐	森岡陽一
主事	佐藤理
嘱託	吉田一男
嘱託	根橋文一
運転技士兼技能員	佐藤春男

[調査課]

調査課長	村上康昭
課長補佐	佐々木嘉直
〃	鈴木恵治
主任文化財専門調査員	小田野哲憲
〃	三浦謙一
〃	工藤利幸
〃	高橋與右衛門
〃	平井進
〃	中川重紀
〃	藤村敏男
〃	高橋義介
文化財専門調査員	斎藤實
〃	佐瀬隆
〃	千葉孝雄
〃	斎藤博司
〃	東海林隆幹
〃	佐々木弘
〃	川村均
〃	鈴木貞行
〃	伊東格
〃	遠藤修
〃	斎藤邦雄
〃	神敏明
文化財専門調査員	佐々木信一
〃	小原眞一
〃	村上修
〃	酒井宗孝
〃	松本建速
〃	笹平克子
〃	花坂政博
〃	佐々木務
〃	金子昭彦
〃	濱田宏
期限付専門調査員	鎌田精造
〃	阿部勝則
〃	安藤邦彦
〃	星雅之
〃	引壁敷学
〃	鈴木知己
〃	藤村隆
〃	千葉悟
〃	熊谷博由
〃	新倉信一郎
〃	山口博英
〃	川村聡
〃	八重座のり子

[資料課]

資料課長	村松義夫
主任文化財専門調査員	田鎮寿夫

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第172集

本宿遺跡発掘調査報告書

国道107号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷　平成4年2月25日
発行　平成4年2月29日

発　行　(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185
TEL　(0196) 38—9001・9002
印　刷　山口北州印刷株式会社
〒020—01　盛岡市青山四丁目10—5
TEL　(0196) 41—0585

© 岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター　1991